

9W-112

植木枝盛編

慷慨  
義烈

報國叢錄

來々舎藏

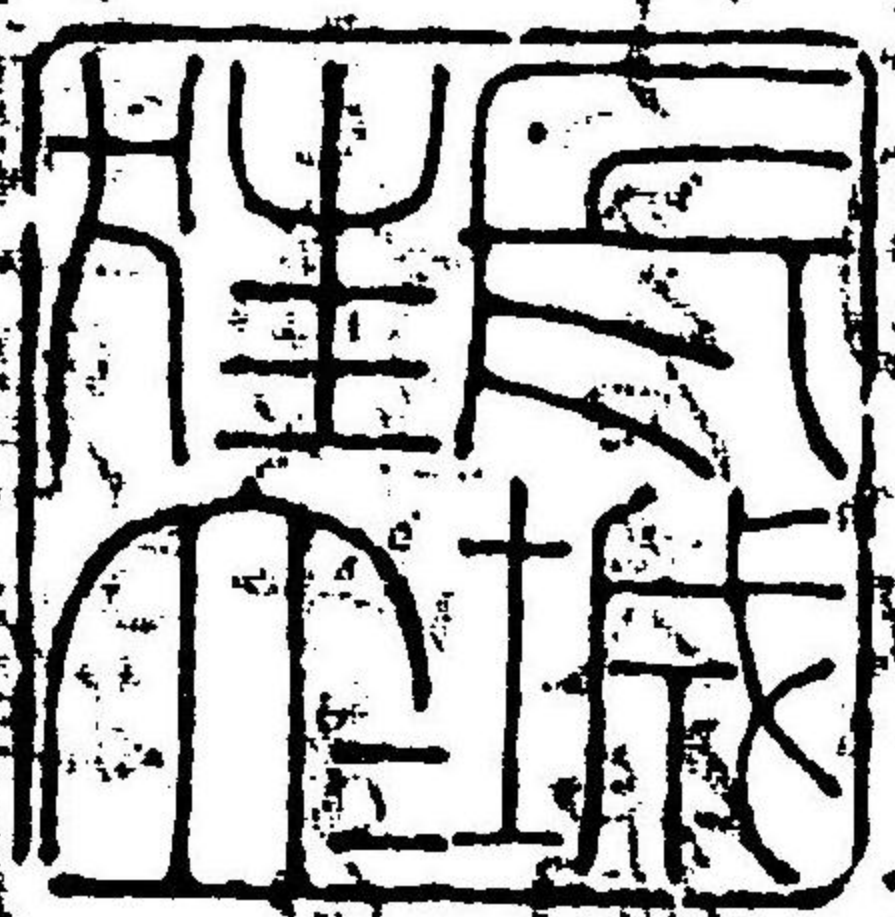
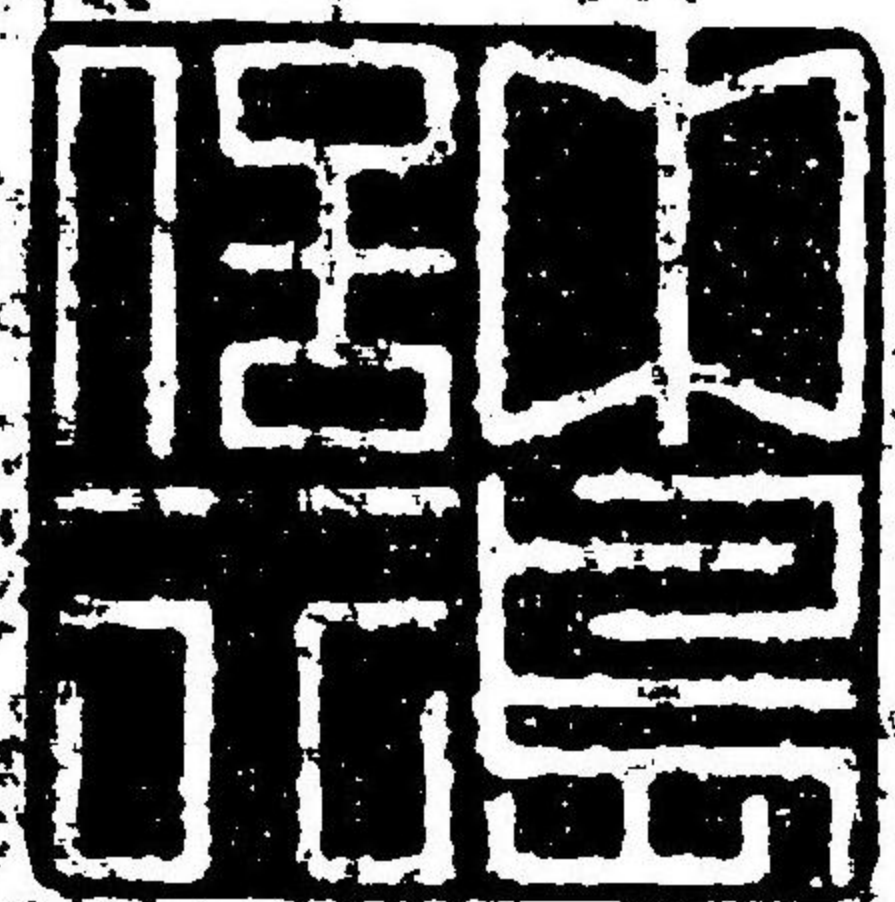


可乎。夫不可以其子之卑傷其心  
不可以其心之陋毀其事。必也。察觀得  
察時與處之兩者。然後可矣。若彼  
墨子曰諸士奮厲唱首。王攘夷。圖報  
於國家者。觀之於今。則未可為宏識  
而以甘時視之。亦不致賞也。矧其徒  
慷慨激昂。而為已者。比之於當時之

者。昔者拂以於後流。其義之方。果幾乎  
乎。植木而為橋。報國。纂。報。蒐。輯。  
尊王報國之。子。跡。者。也。世。之。讀。此。者。  
者。以。其。心。察。其。事。而。可。乎。若。夫。編  
纂。之。備。子。其。書。之。有。補。於。國。家。者。  
不。敢。贅。述。也。

明治十七年十月中泮

長城 中島信行識



凡例

一本書余カ家藏スル所安政年間ヨリ慶應年間ニ至ル時勢  
 ノ詳録數十卷二種ニ本ツキ之ヲ編ス、傍ヲ留魂録、興風集、  
 俟采擇録、殉難草、賜勅始末、近世野史、殉難士傳、烈士傳、ノ類  
 及ヒ其他ノ諸寫本ニ參考シ、訂正補周ス、其間同一書面ニ  
 シテ文字彼此差殊ナキ能ハス、甚シキニ至テハ甲乙丙若  
 シハ甲乙丙丁皆各少差アリ、果シテ孰レニ從フ可キヲ知  
 ラズ、大抵似タルヲ多キニ從ヒ、又ハ文義ノ通シ易キニ從  
 フ

一此書紀事ニ非ラス、聚文也、癸丑甲寅ノ際ヨリ癸亥甲子ニ  
 至ル主トシテ慷慨激烈シ、志士ガ鞠躬盡力改革ノ大業ヲ  
 謀リ粉骨齋身報國ノ志ヲ貫カント欲ス、或ハ鮮血ヲ灑テ

之ニ培ヒ、或ハ生命ヲ捧テ犧牲ニ供シ、矢ッテ天下ノ人民  
 ナリテ新政ノ橫虐ヲ免カレシメ、計畫シタル事業  
 状態ヲ徵ス可キ文書ヲ蒐輯シ、因ニ其事ノ始本ヲ附記  
 シテ讀ム者ニ便ニス、庶幾シハ改革ノ大要ヲ識ラシム、  
 一本書ノ編次多ク類ヲ以テセス、大抵年月ヨリ從テ叙列ス、是  
 レ聚文ノ書ト雖モ其間密カニ史鑑ト爲スノ意アレハナ  
 リ、唯々時ヨリ特ニ年月ヲ以ツテ別ツニ類ハシキ者及  
 ヒ明カニ年月ヲ知り者ノニ適類ニ從テ纂輯ス、亦々唯々  
 便宜ノニ

一本書題目己ニ報國纂錄ト云フ、專ラ赤心ノ士タル者ガ身  
 ナリツテ國家ニ盡シタルヲ徵證スベキ文書ヲ蒐輯ス、  
 故ニ詔勅宸翰ノ類ハ多ク之ヲ載セス、財カニ二三ヲ錄ス

ルノニ、是レ全ク記セザレバ全体ヲ通觀スルニ便ナラサ  
 ルヲ以ツテナリ、

一書中頗ル雜文アリ、恐クハ君子ノ叱呵ヲ受ケシ、唯々苟モ  
 事狀ヲ知ラシムルノ便ト爲シテ之ヲ収ムルノニ、豈他ア  
 ランヤ、

一本書考訂勉メザルニアラズ、然レモ猶ホ未ダ至ラサル者  
 アリ、又ハ彼此ヲ參照スルモ字面遂ニ明カナラサル者ア  
 リ、自カラ期ス、他日之ヲ正サント、冀クハ江湖ノ君子モ亦  
 當ムコトナク之ヲ匡正セヨ、

義 概 報 國 纂 錄

目 次

○ 卷 之 一

- 一 論
- 一 浪士懷中封書
- 一 水月十七士辭世
- 一 佐野竹之助白襦絆ニ記スル歌二首
- 一 同日記ノ奥ニ記スル歌一首
- 一 蓮田市五郎本田侯御預中詩歌
- 一 蓮田市五郎故郷ノ書翰
- 一 櫻田事變狂句戯文其他諸作
- 一 大 惡

一 藤板ちよぼくれぶし

一 ないものづくし

一 いろは文章

一 井伊侯御届風評某甲書簡の抜萃

○ 卷之二

一 吉田松蔭郷里へノ書翰

一 松下塾一燈鏡申合

一 關西有志之者廻書之寫

一 漸姦趣意書並懷中所持之書付

一 三島三郎等七人辭世ノ歌

一 夢路ノ日記並和歌

一 筑前既民平野二郎密奏

一 浪士共石清水へノ願文

○ 卷之三

一 壬戌五月公卿へ被仰出候勅定

一同五月十二日公卿以下へ存意御尋於禁中讀奏列坐拜見

被仰付思召書

一 勅使大原卿へ叙慮

一 島田左兵衛梟首之圖

一 宇郷玄蕃梟首之圖

一 江戸浪人某梟首之圖

一 目明シ文吉梟首之圖

一 九月十二日夜投ケ文寫

一 西院右衛門外三名罰文寫

- 一永野主膳妾並多田帶刀罰文
- 一浪士借金文
- 一長州浪士三度ノ上書
- 一足利三將ノ木像並落文
- 一銀座四丁目張札
- 一張札落書
- 一義勇軍士祇園社西門張札
- 一落書寫
- 一佛人豐前小倉ノ上陸之砌差出書付
- 一亞魯英佛四州盟約書和解
- 卷之四
- 一南山義舉浪士ノ張札

- 一毛利氏奉勅始末
- 一平野二郎家親ノ書翰
- 一元治元年正月將軍家御參内ノ節ノ御宸翰
- 一再度御宸筆勅書寫
- 一將軍家御請書
- 一張紙寫
- 一筑波山義徒盟書
- 一水府果激輩上書艸稿
- 一長藩士朝暮並列藩ノ差出タル書面
- 一真木和泉守辭世歌並烈士墓表文
- 一討奸檄
- 一維新前朝野名士ノ判付



○卷之五

- 一 乞食歌聞新ちよぼくれふし
- 一 娘兒ゆかたノ相談
- 一 怖口獅子花畑一橋戯
- 一 諸國風評
- 一 當世藝者評ばん
- 一 讀新撰論語
- 一 大評都假名手本忠臣蔵
- 一 いろはかるた
- 一 下關流行里謠

慷慨  
表烈  
報國纂錄卷之一

植木枝盛 編次

論ニ曰ク我邦人民ガ曾テ大ニ尊王ノ心ヲ作シ。奮ツテ徳川  
 政府ヲ踏シテ。今日明治維新ノ大業ヲ遂ケシ者ハ蓋シ其ノ  
 由テ來ル一尙矣ト謂フ可シ。神武創業。嗣皇繩々。政柄常ニ上  
 ニ在ルノ間ハ論スル一勿レ。所謂尊王ノ心ハ藤原氏世々權  
 チ專ラヨスルニ胚胎シ。源賴朝覇府ヲ鎌倉ニ開キシニ發生  
 シ。尋テ北條氏陪臣國命ヲ執リ。足利氏驕僭邦家ヲ弄シ。下テ  
 徳川氏覇威ヲ遙カニ王室ノ上ニ振フ一十有餘代ヲ累ヌル  
 ノ間ニ鬱勃シ。遂ニ其末ニ至テ激發シタル者歟。抑藤原氏ノ  
 盛ナルニ當ツテヤ。輦車萬機ヲ關白シ。朝政其族ニ非サル

ハ與カラズ。屋宇壯麗禁闕ニ擬シ。時人之ヲ呼テ内裏ト云フ  
 ニ至ル。百官ヲ黜陟スル。藤原氏之ヲ擅ニシ。帝位ヲ定ムル  
 一藤原氏之ヲ恣ニス。彼ノ道長ノ如キニ至テハ專横既ニ三  
 條天皇ニ逼リテ其位ヲ遜ラシメ。以テ其外孫ヲ擁立シ。又敦  
 明ヲ立テ、コソカ儲貳ト爲シ。以テ三條天皇ノ意ヲ悅ハシ  
 メ。一旦升遐シテ陵土未タ乾カサルニ又其位ヲ奪ヒ。以テ其  
 外孫ヲ立ツ。天下拱默シテ其制ヲ受ク。道長ノ論晋山某  
 評ヲ假用ス率土ノ  
 濱ニ在ル者誰カ之ヲ憤ラザラソ。即チ尊王ノ心此ニ胚胎セ  
 ザルコト能ハサル也。源賴朝ガ六十餘州ノ總追捕使ニ任セラ  
 レ。覇府ヲ鎌倉ニ開クヤ。手ニ土地兵甲ノ實ヲ握リ。其身征夷  
 大將軍ノ位ヲ以テ大ニ天下ノ勢ヲ制ス。誠ニ熾ンナリト謂  
 ハザルベカラズ。遂ニ天子ヲ陽尊シテ而シテ天下ヲ專制シ

久シク假ツテ歸サトルニ至ル。即チ全國人民ヲシテ更ラニ  
 切齒セシムルモノ其ノ幾何ナルヲ知ラサルナリ。是レ豈ニ  
 我邦人民ニ尊王ノ義心ヲ發生セシメシモノニ非ズヤ。北條  
 氏ニ至テハ世ノ史氏之ヲ齊ノ田氏ニ比ス。以爲ラク既ニ覇  
 主ヲ輕ンシ。天子ヲ蔑スルニ至ル。天下共ニ討スルノ賊也ト。  
 翅ニ帝國天子ノ廢立ヲ擅ニスルコト石ヲ弄スルカ如キ而已  
 ナラズ。之ヲ阪島ニ流シ。之ヲ絶海ニ幽シ。或ハ氣瘴ニ死シ奉  
 ラシメ。或ハ魚腹ニ葬ラシメ奉リ。終天竟ニ歸ラズ。甚シキニ  
 至ツテハ都に王ト云ム者ましく。若干の所領をふさげ  
 内裏院御所ト云ふ所の有て馬より下る六かしさよ若し王  
 なくて叶ふまじき道理あらば木を以て造るか金を以て鑄  
 るかして生きたる院國王を何方へも管流し捨て奉らばや

ト口外スル者サヘアルニ及ヘリ。夫レ其ノ大逆虐戾千歳ノ後ト雖モ誰カ其墓ヲ掘キ其骨ヲ鞭タント思ハサル者有ラ。即チ後醍醐天皇ノ赫然トシテ奮怒シ自カラ四方ヲ糾合シテ中興ヲ謀リ玉ヒ並ニ山谷樵蘇ノ民モ亦其橡栗ヲ貢シテ之ニ奉庇スルノ事アリシ所以也。若シ其レ足利氏ハ尤モ姦賊ノ魁ト爲スベシ。新ニ覇府ヲ開テ天子爵賞ノ權ヲ錫シ。驕傲僭越實ニ乘輿ニ擬シ。或ハ慢言スラシ。天子は木佛金佛にても事足るべしト。而シテ弑逆幽斥モ縱ニスル所アリ即チ勤王ノ軍ノ其間ニ起リシモ亦斯ノ如キノ事アレハナリ。徳川氏ニ及シテハ夙ニ公家十七ヶ條ト云フ者ヲ設ケ恐多クモ萬乗ノ君ヲシテ虚位ヲ擁セシメ。而シテ巳レ自カラ天下ノ實權ヲ握リ一ニ其根基ヲ鞏クシ。永ク子孫ニ傳ヘント

シタル一炳トシテ火ヲ觀ルカ如シ。凡ソ王室ニ忠ナル者ハ誰カ慨然タラサラン。左レハ家康カ基ヲ江戸ニ開キ以テ來二百數十年ノ間ヲ通シ天下ノ士タル者内必密カニ之ヲ怒リ。自カラ王ニ勤ムルノ志ヲ養フタルハ決シテ鮮少ナラザルベシ。實ハ徳川氏治世ノ間ニ當リ或ハ江戸ニ向テ槍ヲ擬シタルノ士モアリタラン。或ハ殊更ニ足利氏ノ憎ムベキヲ倡ヘタル者モアリタラン。唯タ其ノ幕府ノ威嚴赫々トシテ敢テ犯スベカラザルヲ如奈ソセン。則チ形ハスレハスレハスレテ而シテ愈鬱勃セザルベカラズ。是ニ於テ乎。書ヲ讀ム者モ密カニ勤王ノ傳ヲ讀ミ。小説ヲ著ハス者モ暗ニ勤王ノ意ヲ寓シ。水戸ノ日本史。頼襄ノ日本外史。若シハ靖獻遺言。遺言類記。及文天祥。楊濟山等ノ書大ニ行ハレ乃チ之ヲ講シ。乃

ナ之ヲ誦シ。其ノ世ニ崇尙セラル、一甚々淺カラザルニ至  
 ノリ。是レ即チ勤王ノ心ノ鬱積シタル結果ト謂フ可シ。而シ  
 テ此ノ果復々旋<sup>カッ</sup>テ因ト成リ更ラニ愈勤王ノ心ヲ旺盛ニシ  
 タリ。ペルリ來ラズト雖モ將サニ一大變革ヲ日本社會ニ惹  
 起サント期シテ待ツ可カリシナリ。恰モ嘉永六年癸丑ノ歲  
 ニ至リ。米國ノ水師提督軍艦ヲ帥テ浦賀ニ來リ。國書ヲ出シ  
 テ通信貿易ヲ徳川政府ニ促カス。幕府優柔斷スル能ハス。危  
 ノト途方ニ苦シマズンハアラズ。外ハ蠻夷ノ威ニ屈シ内ハ  
 京師ノ勅ヲ輕ンシ堂々タル日本帝國チ一朝ニシテ外人ノ  
 前ニ辱シメントスルノ勢アリ。是ニ於テ乎。天下ノ士タル者  
 切齒扼腕慷慨悲憤シ。尊王攘夷ノ心勃々トシテ發ス。尋テ安  
 政四年ニ至リ。老臣井伊掃部全ノ朝權ヲ擅私シ。恣ニ外交條

納ヲ締結シ。翌五年攘夷ノ勅ヲ水戸齊昭ヨリ下サレシヤ。幕ニ  
 鷹司近衛三條三卿ヲ幽シ。小林民部大輔。春日讚岐守。森寺因  
 幡守。高橋兵部。官女村岡。鴉飼父子。橋本左内。巖三樹三郎。梅田  
 源二郎。安島帶刀。日向部伊三次。飯泉喜内。藤森弘庵等數十人  
 ナヲ逮捕シ。次テ水戸中納言ヲ禁錮シ。一橋刑部卿ヲ退隱セシ  
 メ。尾張越前土佐侯ヲ幽居セシメ。遍テ以テ志士ヲ逮捕シ或ハ  
 之ヲ斬ニ處シ。或ハ流罪。或ハ禁錮。幾ント至ラサル所ナシ。夫  
 レ彼ノ掃部守ハ何者ゾ。一個幕臣タルノ身ヲ以テ恐多クモ  
 天子ノ大權ヲ犯シ。幼沖ノ將軍ヲ狹シテ賢良ヲ黜ケ。方正ヲ  
 殺シ。而シテ已レ威福ヲ帝國君臣ノ間ニ縱ニセントス。一  
 何爲レゾ悖亂ノ極マンルヤ。乃チ天下ヲ舉テ深ク討幕ノ  
 念ヲ起シ。切ニ井伊中將ヲ惡マザル者ナキニ至レリ。誠ニ庚

申櫻田ノ變アル所以ナリトス。閣老安藤對馬守モ亦播部守ノ餘意ヲ繼キ。益夷狄ヲ親昵シ。正議ノ士ヲ幽閉シ。強テ皇妹ヲ關東ニ下ス等ノ事アリ。天下婦女子ト雖モ亦何ツ怒ラザルヲ得ン。壬戌坂下ノ變アル所以也。凡ソ是等ノ事アリ。我カ日本人民數百年來ニ鬱勃シタル所ノ勤王ノ心ハ遂ニ胸中ニ溢レサル可カラス。况ソヤ理ニ依リ。道ニ就クハ人ノ姓也。幕府ノ暴虐此ニ至ツテ之ヲ怒ラサルハ人ニ非サル也。適々外夷ノ關ヲ突テ來ルアリ。益之レニ刺衝セラレ愈迫ルノ情ナキ能ハス。戊辰ノ一舉遂ニ三百年ノ幕府ヲ顛覆シ。以テ王政ヲ恢興ス。古ニ曰ク人多クシテ天ニ勝ツ天定ツテ人ニ勝ツト。幕府ノ盛ナルニ當ツテヤ城廓其レ高矣。湯池其レ深矣。直ニ八萬旗ヲ扣ヘテ力剩レルカ如シ。各藩ニ參勤交代ヲ

命シテ其勢ヲ贏タシ。都會ヲ殷富シメテ物權ヲ中央ニ致シ。計番スル所モ亦密ナルヲ極メテリ。是時ニ當ツテヤ雖カ其ノ能ク之ニ敵ス可キヲ料ラシ。而シテ伏水ノ砲聲一發スルニ及ンテヤ歲未タ洽カラサルニ十有餘代ヲ累テテ三百數年ヲ閱シ來リタル大霸業ヲ草莽深浪ノ土ニ壞滅セラレ。空シク一場ノ夢トナリタル者ハ憐ムベク又愚カナラヌヤ。今日江戸ノ市中ヲ徘徊シ。丸ノ内ヲ往來シテ所謂霸業ノ遺跡ヲ仰觀スレハ未ダ曾テ洪歎スルモノ數回ナラスンハアラズ。哀矣夫。

○ 浪士懷中封書

安政五年戊午歲井伊播磨頭親王進シテ幕府ノ元老職ト  
 爲ルヤ夙ニ紀伊宰相家茂ヲ將軍ノ嗣ニ擇ヒ而シテ一檢  
 刑部卿ノ年長且聲望アルヲ納メ即チ幼冲ヲ挾シテ天  
 下ニ號令シ朝權ヲ擅私シテ妄ニ外交條約ヲ締結シ專横  
 恣睢緊シテ四方ノ志士ヲ逮捕シ或ハ水戸中納言ヲ禁錮  
 シ或ハ一檢刑部卿ヲ退隱セシメ或ハ尾張大納言越前中  
 將土佐前少將伊達遠江守等ヲ幽居セシメ天下ノ書生ヲ  
 斬リ正議ノ士ヲ殺シ上ハ王室ヲ侮蔑シ下ハ人民ヲ汚辱  
 シ國ヲ誤リ世ニ殃メ最當モ亦皆ナラズ則全國ノ人民  
 相率テ之ヲ怒リ只々其肉ヲ喰ハント欲シテ而シテ權勢  
 赫々奈シトモスベカラズ古ニ曰ク殺身成仁拾生取義ト

之レアルカナ 時ニ水戸ノ藩士佐野竹之助、大關和七  
 郎、齋藤監物、黒澤忠三郎、蓮田市五郎、森五六郎、杉山彌三郎、  
 森山繁之助、關鐵之助、廣岡豐次郎、山口辰之助、鯉淵要人、廣  
 木松之助、稻田重藏、岡部三十郎、増子金八郎、海渡嵯峨之助、  
 並ニ薩藩有村次左衛門併セテ十有八人アリ萬延元年三  
 月三日ノ辰ノ刻折柄ノ大雪ニ乗リテ筋カニ播磨頭ヲ櫻  
 田御門外松平大隅守殿御門前ニ邀ヘ就レモ袴着結布木  
 履草鞋革具足等ヲ着込ニ思ヒノ出立形容目立ダ、  
 サル体ニ飾ヒ先ツ三人計往來人ノ体ニテ御先ヲ切過キ  
 通ラントスルヨリ取遣ニ及ヒ二人喧嘩ノ体ニモテナシ  
 切掛ル其時隊伍亂ル、ヲ機トシ十餘人ノ勇士卒然ト駈  
 來リ御駕籠目掛取圍ニ折戸ヲ引ハツシ播磨頭殿ヲ引摺

出シ直ニ首打切ツテ大音聲ニ占メト叫ハル井伊勢不  
 意ヲ襲ハレ狼狽スル中御供頭ヲ始メトシ撃タル者夥  
 シ浪人等井伊侯ノ首ヲ取り収メ豫テ用意ノ革袋へ裏  
 ミ懐中シオカヲ南ヲ指シテ引退シ  
此首守護ノ人数五人計行衛  
 不知或ハ水戸へ取歸ルト云  
 時外ニモ首一級ヲ刀ノ切先ニ貫キ同音ニ聞テ揚ケテ掃  
 部頭ノ頭打取ツタリト噉セ日比谷御門ノ方へ引取ラシ  
 トスル場合井伊勢言ヒ甲斐モナク跡ヲ追シテ馳來リ血  
 煙立テ追掛ラントセシガ飽ク迄臆病神ノ附キタル印  
 シカ一人モ得打テ物ヲ別シトナレ  
 因ニニ記ス井伊家一條上杉辻番人聞書ノ大畧一日  
 「申三月三日御節句御祝儀有之例年之通御時刻を以井  
 伊殿御登城之朝上杉屋敷近へ参り櫻田御門より既

ニ制聲を相應上杉辻番より而下座仕居候折柄何者共  
 不知浪人体之者三人其前より馳参り候故辻番より相制候  
 處右之者少く受ぬかす如跡一而直様掃部頭殿徒士共  
 へ浪籍劍戦より相及と見えしより十四五人何れも隠居  
 候哉騒來右徒士之者共同しく浪籍より相及井伊御家來  
 は實に不意之事故士壹人六尺二人打果され候を見る  
 より家來之者過半掃部頭殿を其儘に棄置逃散六尺も  
 同様且跡に残候士共五六人相制候其物音何事やらん  
 と上杉藩中之者共長屋格子開見候處右体を見驚計に  
 而致方無之徒に見物致し居候處井伊家來は雪中之事  
 故雨桐油着候儘彼浪籍者は紋付縞等に而馬乗袴伊賀  
 袴に而輕体桐油と平日之体との事故働難易有之哉彼

者共劍先之勢餘程利相見え井伊方御家來切付られ候  
 度毎桐油に音致し候故見物之者共其方へ目を付候處  
 鮮血流出其儘倒れ候者共有之其内播部頭殿御駕籠脇  
 人少々相成候處を窺ひ兩方を播部頭駕籠へ二人打掛  
 り刺駕籠を泥足にて踏破り目も當られず相見え候其  
 内誰人之首やら知れぬ首壹ツ二人に而持出し刀之先  
 へ右頭を左の耳下へ貫日比谷御門を指而参り候よし  
 其首に二寸位之丸き二尺斗之物播部頭殿之首に而無  
 之哉と心付右駕籠之内に白上下と相見え候服を着首  
 無者相見え候より右体之大變故井伊屋敷を直様右之  
 首を逐付く候等と皆見物致し居候處一人も其体之者  
 無之暫く有て士三四人参り赤桐油着し候仲間体之者

右之駕籠並死骸荷はせ釣臺へ懸せ倒之死骸四五人  
 て持歸り候趣其節上杉公進用御門へ上下着之士播部  
 頭殿御家中之由股立取ながら如此体に相成候故御介  
 被下度頼入候と申腕先三寸斗切れ候者参り候由併是  
 は門番追出し候由

浪人等シツ／＼引退き深手ノ爲メ步行難澁ニ至り途中  
 ニ於テ自殺スル者凡ツ四人。佐野竹之助黒澤忠三郎蓮田  
 市五郎齋藤監物ハ脇坂邸へ欠込ニ自ラ事實ヲ訴テ其ノ  
 時ノ口上書即如左御國許二月十八日出立壹人ツ、方々  
 へ止宿仕今朝同意ノ者右十七人愛宕山ニ寄合櫻田御門  
 外辻番所松平市正様御門外ニ而御駕籠之左右より仕懸  
 候處一端多人數立塞り候ニ付及爭論候内御駕籠へ兩殿



より四人斗懸附御駕籠を差留御引出申候御首を討取聲  
 を揚銘々散し引取申候右十七人之内龍之口御屋敷へ表  
 御門より入込案内を乞候間立合申候處水戸様家來候  
 只今井伊權部頭様を討取候候付此段御役人様方へ罷出  
 御答可申等之處何れも不案内候付此方様へ罷出公儀之  
 御裁許相待候覺悟候付夫迄之處御育被成下候様委細之  
 趣を以御重役之内候御目懸り御咄可申上と申出候間  
 先坊主伺公之間致案内御小性頭立合而表下之二間  
 右四人應對爲致其後御取次方替る々應對致吉田早之  
 助御役人様へ罷出中根平八郎爲御使者水戸様へ罷出候  
 事又大關和七郎森五六郎杉山源一郎森山茂之助ハ細川  
 邸へ欠込自訴狀ヲ出シテ之ヲ呈ス其書曰ク我等大老

一對ノ私怨有之ニテハ無之畢竟國家ノ御爲筋深ク推考  
 仕候處老君當世ヲ憂ヒ給ヒ種々ノ建白被爲在候次第モ  
 水泡ト相成都ヲ當世ノ有様夷賊ノ振舞所謂柔順ニシテ  
 蒙大難ノ場合ニ至ラセ給フ君辱ラレ、時ハ臣死ス我々  
 不肖タリト雖モ老公ノ誠意ヲ繼キ天ニ代リ國家夷賊之  
 難ニ陷ルヲ救ハシ爲ニシテ聊私意ヲ以テ成ス處ニ非ス  
 夫交易ハ三千年 皇國之大害朝家衰弊ノ溢觴タリ是等  
 ノ事乳臭ノ稚子モ知ル處ナリ然ルニ是ヲ患トセス彼カ  
 賤敷銀貨ヲ以我衣食金銀有用之品ト交易則是ニ拘リ有  
 用而已一身富テ國家困數衰へ彼ニハ益々ノニ聊モ外夷  
 ノ意ハ背シ時ハ忽戰爭ニモ及抔ト驚サシ終ニ彼カ恣ノ  
 如クスルニ至ル夷賊都下ニ徘徊シテ市人ヲスカシ掠メ

國人ヲ見ル事土芥ノ如ク此上畿内北國所々ニ開港スラ  
 ハ國民衣食スル事不能手足ヲ置所ナキニ至ル事指テ折  
 テ可待霜ヲ蹈テ堅氷ニ至ル國衰ヘルヲ愁トセス徒ニ俗  
 吏等夷賊ヲ饗敬シテ國ヲ賣已テ利シ當世ヲ愁ル烈士ヲ  
 不殘我意ニ死ヲ與ヘ戮スル事ニ成ヌ是ニ依テ其首惡ヲ  
 罪科スル事素ヨリ法則ニ任セ候得ハ聊厭フベキニ非キ  
 ソレ我死後ニ至リ候テモ此弊政ニテ御政メ無之時ハ  
 皇國永ク外夷ノ奴僕ト成ヌヘシ嗚呼悲哉々々十一人ハ  
 酒井侯屋懸ニテ自殺シ二人ハ備前侯屋懸ニテ自殺シ一  
 人ハ遠藤侯屋懸ニテ自殺シ五人ハ行衛分明ナラズト云  
 フ右浪人共懷中ノ封書即チ左ノ如シ  
 墨夷浦賀へ入港以來征夷府ノ御處置縱令時勢の變革も有

之隨而御制度の變革も無くて叶はぬ事情も有之とは乍申  
 當路之有司専ら右を口實として一時倫安畏戰之情より彼  
 が虚喝の勢焔に恐怖いたし貿易和親登城拜禮とも指詰し  
 條約を取替はし賄給を廢し邪教寺を建「ニコストル」を永住  
 爲致候事等實に神州古來の武威を穢し國脉を辱かしめ  
 祖宗の明訓孫謀に戻り候而已ならず第一  
 勅許も無之儀を被差許候段  
 天朝をも奉巖如候義も有之重々不相濟事に候追々大老并  
 伊掃部頭殿所業を致内察候に 將軍家御幼少の御砌りも  
 乘し自己の權威を振ん爲め公論正議を忌憚り候て  
 天朝 公邊の御爲筋を深く被存入候御方々御親藩を始め  
 公卿衆大名御旗下に不限讒誣致し或は退隱或は禁錮等

被仰付候様取斗候義夷狄跋扈不容易砌と申内憂外患逐日  
 差迫り候時勢に付恐多くも不一方被爲惱  
 宸襟御國內治平公武御合体彌長久之基を被爲建外夷の侮  
 りを不受様被遊度との  
 叔慮も被爲在 公邊の御爲  
 勅書御下け被遊候様も奉伺候處違背仕り尙更諸大夫始め  
 有志の人々を召捕無實を羅織し嚴重も處置被致甚敷に至  
 候ては 三公御落飾御慎み粟田口 親王をも奉幽閉無勿  
 体も  
 天子御讓位の事迄奉醜候程に奸曲無所不至矣豈天下の巨  
 賊も非すや右罪狀之義は委曲別紙も認候通りも候斯る暴  
 惡の姦賊其儘差置候ては益々 公邊の御政体を亂り夷狄

の大害を來し候儀眼前にて實も天下安危存亡も拘り候事  
 故痛憤難默止 京師へも及 奏聞今般天誅に代り候心  
 得よて令斬殺候勿論 公邊へ御敵對申上候義は毛頭無之  
 何卒此上は聖明之  
 勅意に御基き 公邊の御政事正道に御復し尊王攘夷正誼  
 明道天下萬民をして富嶽の安きに處らしめ玉はん事を希  
 ふ而已聊殉國報恩の微衷を表し伏して天地神人の照覽を  
 奉仰かし

別紙

皇國千萬世 天日嗣連綿照臨し給ひて伊勢の神宮も上古  
 に替らせ玉はき神道を尊ひ武力を尙ひ玉ふ事自然遺風餘  
 烈なれば古より遠譽を展へ給ひ且夷狄の禍有之候得ば精

々退讓し玉ひし事青史も著しく今更奉稱揚も及はと武將の世となりても弘安の蒙古を塵にし文祿の朝鮮を征する事共神州の武威を海外に輝し候義人口に膾炙する所なれば是又贅言を不待 東照宮に至り玉ひて尊 王懷夷の御志深く被爲在候は不及申上勅興の御盛時なれば其初は諸蠻來航通商等をも許し置給ひしなども諸蠻を畏服して覬覦の念を遠する事もならず然るも 東照宮終に其巨害有る事を洞見し玉ひて洋教の禁を嚴にし玉ふ 大猷公に至り益邪教を驅斥斬戮し三眼の明を四海に布き玉ふ事誠に千古の英見卓識にて後嗣遵奉し玉ふ所なり備近時に至りては夷狄に狡謀黠略の者多く出て万國と通信貿易し遂に小を併せ弱を制し次第に境界廣大相成候勢ひも乘し屢

神州をも覬覦するに至る乍去打拂の令有之時の格別の事は不成得して打過す天保十三年打拂の令を停め仁恤せられしより頻りに來航し跋扈之態を顯せよ至る就中嘉永癸丑墨夷浦賀へ入港威嚇を示し難題申懸け候以來は 征夷府の御處置方今時勢の變革も有之一概に御國威御主張難被遊議は治世の風習左も可有之事に候得共申迄も無之夷狄の貪婪元より屢事なく殊に狡謀譎計を挟み覬覦の念を逞く致し候故詰り邪蘇之術中に陥り 神州の泰否にも拘り候著眼の大基本 御廟議御一定の上詰り御制度御變革無之ては於時勢不叶筈に候得共近來諸蠻夷の御扱振推察仕候ては乍憚一定の御廟筭如何可有之哉去る卯年迄は内備嚴整之御違も有之邊海の御守衛被仰付候大名に至り

候てり多年防禦の爲國力を費し被屬忠勤候所不測も去辰  
 年和親交易御取結の上恐多くも征夷將軍の御居城へ夷  
 賊ども登城被仰付利へ御饗應尊敬を被盡候有様春秋城下  
 の盟を恥候比較に非と神州古來未曾有の御失体よて實  
 に冠履倒置の御所置と可申驚歎之至りに候縱令御國政  
 の儀關東へ御任せに相成居候逆斯る重大之事件第一  
 勅許も不爲在候儀を全く掛りの有司數輩の了簡を以て五  
 ヶ國へ本條約差許し將軍家御印章の御書翰迄被差遣候  
 始末何卒偷安の末俗戰爭に及候儀を恐怖致し候也天下後  
 世へ對し大義名分と申も有之征夷御任如何可有之哉忝  
 くも武門の列に連り二百年來の恩澤に浴し候ては不堪悲  
 泣之至候況や徳川御家譜代恩顧の士東照宮の神靈へ

奉對沈黙傍觀致し居儀廉恥無之と可申決して不相濟事也  
 扱前件夷狄交易の義如何様も  
 勅許申受所存にて去る己年春堀田備中守上京致し賄賂金  
 錢を以て關白殿下を誑惑致し無勿体も可奉暗  
 龍眼と陰謀秘計不一方候所

今上皇帝聰明絕倫千歲不世出之  
 聖主よ被爲渡皇國開闢以來尊嚴之國体淳厚之風俗  
 今上の御代に及び夷狄の爲めに消却汚穢被致候ては第一  
 伊勢神宮を御初御代々の御神靈へ被爲對王位の御任不  
 被爲濟尤戰を被爲好候には無之國体を不失万民安堵に被  
 遊度との叙慮により賢くも一七日の間石清水等へ御祈  
 禱被爲籠關東より如何様被申立候共一切御許容難被遊萬

一非常之節縱令萬里の波濤を越え孤島に終り候共御憫不被爲在候得共 泉涌寺を御離れ被遊候事難被爲忍と竊に宸襟を御惱し被遊候事傳承仕候四海の人民誰か感激悲泣せざらんや當神州の氣脈實に累卵よりも危き事なりしか百官群臣忠憤切齒の餘り八十八人の堂上方 禁中へ馳参り万死の力を以て諫奏を奉り其外有志の大小名勤 王の微忠を獻せし故三公御初め彌増感憤被遊安政乙卯被緩獻慮候三港の外近幾及び數ヶ所開港並與狄永住邪教寺取建等之義は一圓御許容難被遊様 勅命を以御下知被爲在猶又内地人心の居り合如何ふ付大小名の赤心も被 知食度尤衆議奏聞之上 叙慮難被決候者 伊勢大神宮 神慮可奉伺との御儀三月

廿八日議奏傳奏衆より堀田備中守へ御返答書被指下俄の下向被仰出候由の處夷狄と内條納の義は既に被指許候事故諸大名の赤心有体達 叙開候様にも不相成依之表向天下へ意見建白之達は有之候得共蔭より某等を以專西洋の事態を強大に主張し交易を差許とは一時の權宜無御據萬一關東の御主意に違候ては家の爲に不相成と吉凶禍福を以遊説致し猶又御三家方へは御建議の文意認直し候様御内論も有之由も候得共水戸前中納言殿は關東輔弼之名將に有之尊 王攘夷之御論始終一致の御方故御廟算伺書といふ書壹冊當今の急務より將來の大害迄丁寧誠實に建白被致尾張中納言殿にも御内論に不泥京師の御旨意は本つき御所置に無之ては不相濟と被申立候由實に難有事と

可云其後彌

勅許の有無に不拘關東而已の御決斷にて仮條約御差許し相成候趣に付御三家にては尾張中納言水戸殿御三卿にては田安殿一橋殿御家門よりは越前殿忠誠無二の御方御一同登城に相成將軍家へ御對顔被願候處御所勞にて御逢無之伏之元老井伊掃部頭初御呼出し天子之勅命御遵奉無之仮條約を差許しに相成候ては將軍家御違勅之罪御逃被遊間敷東照宮以來御代々様へ御對し被遊候ても如何も可有之哉各方の了簡も承り度どの御一同御演述に相成候處御前にては掃部頭殿始畏服致し候由に候得共執頭權威を以不日に條約指許恐多くも將軍家を御不忠御不孝に陥れ奉り徳川御家の御稱號を

千百歳の後迄奉穢候而已ならず將軍家御大病人事をも御弁も無之砌に乘し無實の罪を羅織し御親戚の御方々を奉禁錮其他正議之大名松平土佐守始兩三人御威光を以て隠居爲致候所業惡にも餘り有り可申候且亦御幼君の御時節を幸とし御三家方の權勢を摧ん爲め御連子又の家老よて主家本宗をも押領掌握せんと奸曲を巧み有之松平讃岐守水野土佐守竹腰兵部少輔等徒党に引入種々の奸計を運らし且我意に隨不申候正議之士をは貶斥致し東照宮以來の美意冥法追日破壊に及候事長大息の至りに候其後八月に至り

叔憤の餘り三家大老の中上京致候様重き勅書御下ケ入罷成候處御情にも差支尾水兩家の義は不承

の義有之慎み申付掃部頭御用多にて上京難相成且先輩堀  
 田備中守等取扱候儀今更致方も無之依て嚴重申付候旨議  
 奏衆迄申立已が逆罪を遁れ可申と相工み間部下總守上京  
 爲致専ら恩威を以押付候所存よて賄賂を用ひ九條殿下を  
 徒党に引入内藤豐後守に命し御所向取締彌増嚴重に致恐  
 多くも天子御讓位をも被遊候様奉要候得共三公御初御賢  
 明の御方マシク奉輔佐  
 叙慮候ニ付 朝威確乎として御撓し不被遊伏之無實の御  
 罪申觸し鷹司殿近衛殿三條殿等御落飾御慎み被遊候様取  
 計其他諸大夫始め何一つ罪科無之者を召捕關東へ指下し  
 夫々非道に處置致し専ら虎狼の猛威を以天下を屏息せし  
 め畿内に開港並邪教寺取建等本條約指許し且青蓮院宮様

御英邁を奉忌御失徳有之杯申觸し御寺務御取放奉幽閉候  
 所業乍恐 玉牀にも奉迫候機顯然よて北條足利の暴横に  
 均しく不共戴天の國賊と云ふべし嗚呼此儘に打過候ハ、  
 赫々たる神州一兩年を不出内地は奸民邪教に靡き彼が勢  
 船を助け 皇國の姦賊平心低頭して彼が正朔を奉すると  
 掌の上に見るが如し苟も人心有之者實は痛哭長大息に不  
 堪事に非そや雖然 東照宮の徳澤未だ地に不墜御三家御  
 一門には尾州殿水戸殿一橋殿越前殿河波家因州家の如き  
 徳川輔佐の眞將も有之外諸侯も薩州仙臺福岡佐賀長州  
 土佐宇和島柳川等天下の爲め忠憤の念日夜不怠有名の諸  
 侯も不少候ハ内は則御家門方 將軍家を奉輔佐専ら内政  
 を修め外は則有名の諸侯一意忠力を盡し武備整ひなば神



州の恥辱を一洗して奉安  
 叙慮候事天地神明に誓て疑あるまじ依之當今事態の概略  
 を記して天下の公論折衷を待左祖して天下を興起せんと  
 欲す所なり周の衰る婦人すら不恤緯して周家の衰を憂ひ  
 して況や三千年餘りの天恩を戴き二百年來東照宮の  
 恩澤沐浴する者誰か報效の念なからんや草莽の臣痛憤  
 切齒之餘り寢食を不安日夜遺憾を吞んで時世を憂ひしが  
 彼が罪惡逐日增長豈唯徳川御家の罪人而已ならんや實  
 ん神州の逆賊也然則天地神人同憤の時に乘し天下諸藩の  
 同志と合力同心して天下の姦賊を誅伐し神罰を蒙するも  
 の也

昔ハアラタスガ羅馬ニ於テシーザルヲ誅メヤ一千

五百餘年ヲ經テ英國ノ詩人ヰエーリスピア氏右アラ  
 タスガシーザルヲ刺シテノ後ノ演舌ニ擬スルノ文  
 チ作り頗ル地下ノ靈ヲ慰メタリヰエーリスピア氏  
 シテ試ニ此書ヲ一讀セシム其ノ將々如何ナル文章ヲ  
 ヤ作り出サシテ嗟予之ヲ知ラサルナリ 榎逕居士評  
 十七士ノ墓今小塚原ニ在リ互ニ高輪泉岳寺四十七士  
 ノ墓ト南北相對ス。 同評

○水戸十七士辭世

齋藤監物一徳

君かためつもるおもひも天津日に

どけてうれしきけさの淡雪

大關和七郎

何のそのおもひは消し春の雪

黒澤忠三郎

はるくと心越路のけふこそは

思ひも晴て結ふ夢哉

杉山彌一郎

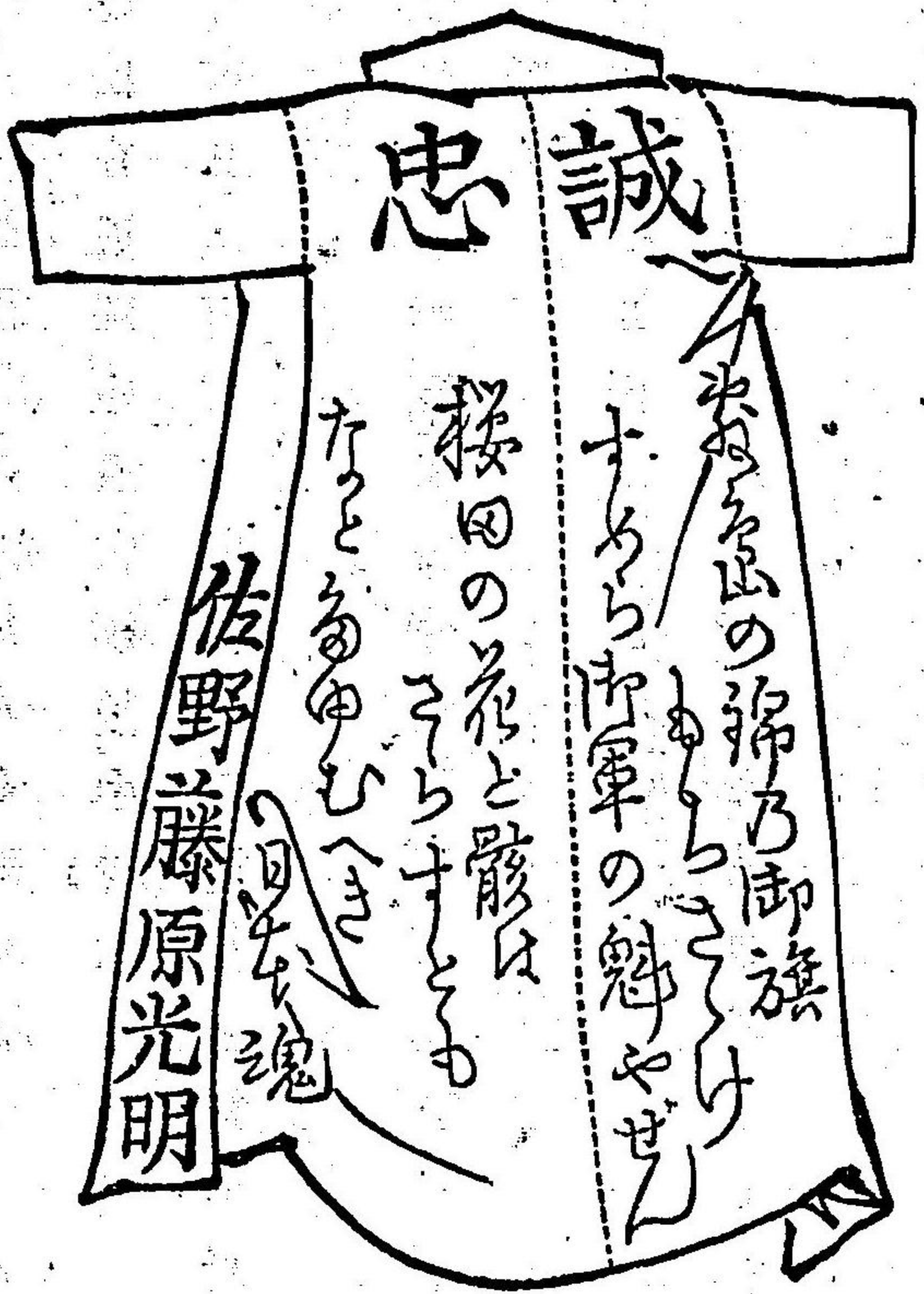
一筋におもひは晴れし今朝の雪

森五六郎

君の爲め打てくたくる玉はこの

晴れて見よかし大和魂

○佐野竹之助白編織ニ配スノ歌二首



○同日記の奥ニ配ス一偈

岩かねもどふさ、らめや武士の

國の爲とておもひ切る太刀

○蓮田市五郎本田侯御預中詩歌

呼<sub>レ</sub>狂呼<sub>レ</sub>賊任<sub>二</sub>人評<sub>一</sub>多歲愁雲一日晴恰是清明好時節櫻田

門外血如<sub>レ</sub>櫻

春滿墨江煙景新櫻花爛熳對<sub>二</sub>紅塵<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>憐昔日遊遊子空作

從容就死人

諸<sub>レ</sub>人の花見るさまにひきかへて

あらしまつ間の身そわはれなる

○蓮田市五郎故郷へ之書翰

一筆申上奉り候此頃やうく天氣もついきのどやかよ罷

成候處まそく御母様御姉さま御摘遊し御さげんよく御

座遊され誠よくめで度御事に奉存候扱私事去月三日之

間同志之者都合十八人申合せ御大老井伊掃部頭殿と討留

夫より御老中脇坂殿へ自訴よ及び其夜細川家へ御預に相

成同九日之夜本田修理亮殿に御豫替に相成今日迄日を送

り申候兼々御承知被爲在候通り井伊家は天下の奸臣にし

て御家へは猶更仇敵也一昨年の御家臣には安島帶刀様萬

根先生を始として天下有名の人々むじつの罪にて死罪に

行はれ或は苦心の餘り切腹仕或は獄中にて狂死し或は遠

き島へ流さる、者等出来候も全く井伊家の所爲なれば天

下の御爲此度私儀討手の人数に加里本望を達し候段まつ  
 く、健なる致方と御悦ひ可被下候其場の働は随分人には  
 劣り申さぬ様覺へ候手疵は右の肩二寸同脇三寸二ヶ所い  
 づれも今は平癒仕候最早せんさくもあらく、さわまり候  
 へは御仕置に逢候事と奉存候二十八ヶ年の御鴻恩露塵報  
 ひ奉らそ先立不孝は如何様存候而も唯々致方も無之忍入  
 候儀は申上迄も無御座候何卒く、御ゆるし被下候様願へ  
 上候情御身の上を勘考仕候に御母さま程いんがなる御方  
 は世間に餘り御坐あるまじく御としみそしあまり御父様  
 に御別れ遊ばし大勢の兄弟とも御獨して御養育遊ばし其  
 内度々の不幸かたく、御苦心のみ遊ばされ候事言の葉よ  
 盡しがたく殊に男子としては私一人なるを千辛萬苦して成

長せしめ漸三四年以來少しは御安心の御座も有之歎と奉  
 存居候處又々一昨年より御國難打續始終御心配の中へ此  
 度之次第御聽被遊候而は如何計の御悲歎やら御察し申上  
 奉るも實に恐れ多く奉存候宿元出立の砌前文之次第一言  
 も不申上ろくく、御暇乞も不仕罷出喚々御腹立させられ  
 候半と奉存候私儀も今更千悲後悔仕事も御座候尤其節意  
 味申上候り、御悲歎の餘り如何成思召にならせられ候半  
 やと存上候ま、不申上事に候へば其罪も御許被遊可被下  
 候私身分之儀者最早致方も無御座候今日之中にも御刑符  
 迄に而大半はりのつけに掛ケらる、事と存居候得共返らぬ  
 事故思切遊ばし御姉さまへよき聲御取遊ばし私と思召御  
 一生を御暮し被遊外有之間敷候と奉存候繰返し考見候而

も人の一命に限りあるものと相見申候死すべき時生るも  
 あり又生べき時死るもありて私杯御先立申も佛家に而申  
 さは先世の約束事に而是が所謂天命と申ものにて候故と  
 奉存候左もなくして人間の一命が容易に捨らるゝ物よりは  
 無は座候私儀昨十月中大病相煩候節相果候に、此度之事  
 へ出ると能はず病死とるより天下の爲死とるこそ本望な  
 れど都而御心を切替られ且人間世界の常なきを御悔り遊  
 ばしどの道御あきらめのはどくれぐれも願へ上候  
 一、は姉さまへ申上候是迄海山の御恩を蒙り難有存上候一  
 生の中にはいつしか御恩報し可仕と存居候處今般の次第  
 に而御恩返し所よりは無之思ひ掛ざる御悲歎を相掛甚恐入  
 候事よは座候最早私身の上は致方も無之此上は專一御母

さまの御事大切には座候私よりは御母さまをふり捨候様成  
 行不孝の上も不孝を重ね何共申譯無は座候不届者めと御  
 腹立させられ候半ぬ是も私の爲ならそ君の爲世の爲なれ  
 は是非なき次第と思召替られ是より別して御心を盡され  
 御母さまへ私の分まで御孝行は盡し被下候に、尤とへ私  
 は死候而も草葉の蔭よりは禮申上候御姉さまの是迄御縁  
 付遊ばさるも唯今に而はケ様な譯になり行御母さまを  
 は御姉さまが御預り被成候事とせんぐよりの定り事か  
 と存上候呉ぐも御母さまの御事計り大切にねがへ上候  
 一、金町御姉さまへ申上候私ケ様も成行無々御悲歎の御事  
 と奉存候私事はあきらめ遊ばし御母さまを御大切に遊さ  
 れ可被下候子供等は能々御育可被遊候此手紙三度目に漸

相認申候二度程書はしり半ばに至りて落涙に沈み書筆申  
 候御母さまへ御禮御暇乞御申譯旁申上候得共御手元迄届  
 候哉も不相知万御披見相成候候、此書狀にて御あさ  
 らめ可被下候申上度事は山々に御座候へとも逆も筆よは  
 盡しがたぐ且人目を乏のび泣々漸相認候儘只々御暇乞盡  
 奉申上候、  
 申聞三月朔日  
 御母さま  
 御姉さま御もどへ  
 尙々是方は何事も境左五郎様へ御相談遊はしは世話も相  
 成可被成候左五郎様が玉川先生ならば何も眞實深き人ゆ  
 へ如才致し具申候司命九々預分金十六兩壹分二朱之内拾

二兩受取申殘金四兩餘は向原へ御掛合御取可被成候其外  
 石神村覺藏と申者へ金三兩貸置申候間是は鈴木彦藏と申  
 人摘實藏殿妻の弟にて其意味存居候へば参成御相談被遊  
 御取返し可被成候  
 御暇乞申譯旁涙なからよ一筆申上奉り候此頃日永に罷成  
 候處如何御暮し遊され候や此案し申上奉り候今はの際に  
 罷成御母さまの御事のみ晝夜苦心に堪かね實に身骨も碎  
 くる思へに御座候又御母さまにも色々私を思召さ  
 れ御心を碎き且のつゝかなる奴と御腹立せられ候半と  
 涙のかわく間無御座候私事も忠孝義の爲と存し色々盡力  
 仕候處只今に相成候而は万事破れに相成不忠不孝の身と  
 罷成今更殘念致し方も無御座候私儀は去冬大病相煩候節

相果候と御あきらめ被下返そくも御愁傷遊はされ間敷  
 候何はと賢人君子とても思へつくせし事の破れ候て皆手  
 違と相成申候況其餘の者は勿論の義と奉存候何卒二十八  
 年の御鴻恩をひとつも不奉親先立不孝は御ゆるし被下候  
 様幾重もねかへ上候万事も破れ候へは今日方最早なから  
 ゆる程も無之一日も早く相果才度奉存候御母さまには此  
 上御機嫌よく入らせられ跡々の事今一際御丹誠遊はされ  
 候様才上迄には無座候へとも願へ上奉り候あゝいかな  
 る不運にや万事破れて不忠不孝の身と相成死候私の心事  
 も御察被遊可被下候何程操返も思への程なくまじ  
 て思へは筆には難盡唯々御暇乞迄荒く上上奉り候あは  
 れ世の中には神もいらぬものと思ひあきらめられ候

四月朔日 御母さま

口上

先以御家内様中御揃益御機嫌能被遊御座恐悦に奉存候扱  
 者小生儀去月三日斬衰輩へ加り遂に本懐をい相達申候同  
 志之者四人に而脇坂侯へ及自訴當節は八丁堀本田家へ御  
 豫被仰付先今日迄無事消光罷在候尊大人には幼少之時分  
 か御厚情を蒙り御禮筆紙に盡し難く候最早生前拜晤を得  
 候事不相成終天之遺憾此事に御座候御禮御暇乞旁委曲可  
 呈一書と奉存候得共家郷之念一發血涙潜々心膈如焚大勢  
 之役人列坐中獨坐涕泣も弱心の至と思へれんど何か恥か  
 しく奉存候故前以不呈一書候万候之心中御宅之思召を御

候様母に申越候間何卒御垂憐御世話可被下候大半穿鑿も相濟去月廿七日評定所へ出候儘今以呼出し無之不審に存居候處昨日承り候得ば禁幸之二人も於大坂被召捕候由不堪驚愕候定而素志も不相伸内と相見候得ば各輩も速に死に就を以善と心得申候何れ典刑は磔か梟首と相見候得共是は覺悟之前なれば假令如何様被致候而も毫も厭は不仕候只々日夜心中に不絶悲泣仕候者母之事に而御座候何卒此壹通御直參被下母へ御渡何分にもあきらめ吳候様御示教之程奉願候母にの一言暇乞迄に紅涙に沈み大略相認候處如何出來候哉讀返しも不致定而前後不調相分兼候半尊大人より而御讀聞せ奉願候僕之死に來月半と相覺申候他日死日相分候に、招魂之祭式に儒道に而相願申候何事も

宜様奉願候御暇乞乍早略如此御座候以上

閏三月廿五日

藤再拜

泰幡尊大人

余曾テ赤穂義士小野寺秀和が同志四十餘君誓吉良氏ヲ討ツノ後其妻阿丹ニ與フルノ書ヲ讀ミ。覺ヘス涙々トシテ涙下ル。然レモ今ニシテ之ヲ思ヘハ彼レハ其妻ニ贈ルモノニシテ這的ノ如キハ則其母ニ呈スル所ニ係ル其心ヲ苦シムルノ深キコトハ蓋シ同日ノ論ニ非ラズ。試ニ問フ天下ノ壯士。讀シテ流泪セザル者アル乎。

野史子評



○櫻田事變諸作

頭とられたいの掃部となりけり  
 雪の朝とふく隠居かもをしめ  
 水風呂のい、加減だど首つさり  
 非伊かもと雪の中にて首をしめ  
 雪の日や隠居仕事にかもをしめ  
 櫻田へ無常の風のさそい來て散らそ彌生の奥は非伊花  
 足白く粘か黄色でつら青し御門か赤く内がまっくら  
 非伊ようい所々でかわれども彦根なまりに首はないく  
 赤門の旦那登城の雪みちに大老せきよ水戸もない死よ  
 櫻田に仇な深名の立しよりみどかめられてい、分もなし  
 たてからも横から見ても二本棒眞向に見れば非伊のべら

ばう

もろどもよ哀れと思へ外櫻水戸より外に切る人もなし  
 是迄の忠勤みんな水戸の泡家門に疵がつくかつかぬか  
 春なれば外の櫻を非伊見花水戸もない程ちり失にけり  
 非伊事も油断したのがあやまりの跡の始末は水戸もない  
 らふ

非伊仕掛離の祭りか血祭りか眞赤よ見へし櫻田の雪  
 花盛舞櫻田よ雪嵐して水戸黄門に懸る世の中  
 去かへしをして非伊君の色黄水戸疾武威のふいも恐し  
 飛鳥も落る威勢の大老も非伊甲斐もなく我首を落つ  
 大老の威風吹かせし返り風外櫻田に首そ散ける  
 たしぬきよ首の彦根を取られては非伊かもんては跡はつ

けまい

淺草や上野の花は今暫し外櫻田は火花散りける  
今迄は井伊掃部とはみたれ共首切られては水戸もなくな  
る

討落と外櫻田の生首は是は井伊君く

近江八景

櫻田の青亂 日比谷の落尸 井伊の半死半鐘

一石橋の歸藩 上巳の朝の雪 掃部の廻の月

家内の夜の雨 世間の永咄し

外櫻田の大騒動とかけて

義經千本櫻館屋の段と釋く

必は首のない此御駈よ此御届は何故ぞ

首が飛櫻田騒く世の中よ

何とて町は淋しかるらん

井伊掃部頭と遊様ニ書て訓に

頭部掃伊井

○大悪

大悪 大悪恩仇  
今改如字

井伊屋敷ノ門赤シ常ニ赤鬼ト字ス  
朱鬼愁苦

仕返子、曰大悪後主之意趣而兎角入欲之門也  
於櫻田可見四人死者獨頼此變損而願望足之

從者必容之而間部焉則庶乎其類矣

大惡之道在明銘辱。在侮上。在滅自然。死云瞻彼日雪。能々降。有懸變死。如切。如討。如刺。如割。這兮。駢兮。飛兮。逝兮。有來藩士。終不可走兮。如切。如討。者道惡也。如刺。如割者見怖也。這兮。駢兮者無面目也。飛兮。逝兮者有異議也。血有半死。終不可忘兮者道隱惡自然無民之憂限也。死者即死也。這兮。逝兮。拔腰者皆狼狽自注進及數入。將是討遲々而來者。恐怖之甚族矣未詳

右變一統。蓋忠士言而藩士慕之。其殿之愁傷則惣衆之意而叛人讐之也。舊根頗有卓山。今因變死。所極而更不考後難則為恥辱如左凡三十五万石之輩舊根

者年來之根云恥辱  
永世汚名殘之意

評定曰克明惡

(十七士也)

閉口曰此度之顧銘々

(世人也)

手々曰克明殘黨(非伊同志役人也)

皆自贍遺也

右刑之首級。正明政道

○新板ちよぼくれふし

一ちよんさりやし云

ヤレく皆さん。聞てもンンチへ。わつちも。此度の。事聞た

よ。櫻田御門の。その又手前の。場所はこゝら。先ッ市の正。表御門の。其まんまへで。四十七人。三十のけて。すぐり立たる十七入で。當時日の出の師直さんを。チヨットちよぎつた。咄しを聞チエ。年は安政七ツの申で。時は三月上巳の節句。諸國大名の。登城の折柄。ひねに相圖の。柏子木打て。松の廊下の遺恨ぢやなければ。師直おそしと。手くすね引て。待つとも知らずに。向の方より。虎の威を假る。人足などが。ホウイ〜と。肩は八の字。お口はへの字。白の股引。對の出立は。言はずと知れた。當時の執權。師直さんと見る目も早く。面もふらずに。切入る鋒さきの。強さに畏れて。ふとい尾をふり。逃出す臆病。あどは一人。師直さんは。鶴籠の中にて。思案もあどさき。ひとにつかれて。三途の旅路。首は東に。からだは西にはなれ〜の人足

なんぞは其所に三人。彼所に二人。腕がないとか。天窓がないとか。うろ〜。うろたへ。主人の敵を見ながら逃して。屋敷に歸るは。素より。懦弱の風とは雖も。餘りたわけた。始末じやねへかへ。ソレハ扱置。十七人は首を。刀に。團子の襟に。うまくさしたと。引取後から。前又珍鋒下ケたに似合ぬ。泣面出して。ソノ首コナテへ。渡して下さい。よくも言れた口上じやないかへ。サホドはしくば。切り取りなりとも。それば世間に少しの言譯け。モシモなければ。立て。上げやまよ。又もおかしき。鎌倉御政事。處々の屋敷へ。亂坊そるなら。鐵炮打ッても。苦ふないぞよ。たまげた御手當。何々おかし。臆病役人。其日の事から。供を増したり。人数を出したり。サホド命がおしい事なら。丸で御役を斷り申して。天窓を圓めて。坊主にばくるか。ひげ

とのぼして。隠居をさるのか。ニッポ一ツのろの身の落付。サ  
 ント氣のある。鷲鷯シウリョウは。うぬ等が様な。小雀なんぞは。目にもか  
 けない。安心まなさへ。ソレゾモ奥さん承知がないから。お國  
 當りの。易者を頼んで。咄しを聞きへ。亢龍有悔コウリョウウケと。お釋迦さん  
 でも言はれた言ばか。ヨレカお前に井伊戒で。けさの騒きも  
 全く是故。己れ獨りが。上ない積りて。世間の勘きを。自由よす  
 る故。人の怨みが。積み疊カサなりて。富二の山よりモナツト高く。  
 伊勢の海よりモナツト深く。今わのわとわから。悔ても及はぬ。  
 よくも世間にあかれたベラホ。非業の事に。死だと言ふ  
 ても啼くは鳥と鷄計。今朝の死目が。おそいじやないかへ。是  
 から。皆さん。氣を付けさんして。たいて。な處で。引がかんじん。  
 サレバ天下も御武運長久。御子孫繁昌。萬々年も。まゐるく治る。

お目出たや

○ない物づくし

凡世の中無い物盡し。かたい中よも。今年のない物。たんとは  
 ない。上己の大雪めつたにない。櫻田騒動とはうもない。ソコ  
 デどうやらお首がない。うれでもとふやら追手がな。壹人  
 りや二人りじやまかたがない。引馬とこへか失てない。お駕  
 籠は有ても昇てがない。上杉辻番色がない。御番所とこでも  
 留てがない。浪人少も驚氣かない。脇坂取次出て来ない。櫻は  
 笑ても見てがない。茶屋小屋芝居は行てがない。唐人ばなし  
 丸でない。道中飛脚の絶間がない。伯耆のうわさもうろでな  
 い。うこで板倉着がない。續岐の騒知る人ない。藝者此節呼て  
 がない。常陸の寶藏寶がない。諸屋敷門々出入がない。夜中さ

つぱり通りがない。町人金持氣が氣でない。老中増供見ッともない。全体役人腰がない。是ではさッぱり治らない。夫でも先ッまお軍がない。どうだかわたしは請合ない。無物の無いはともあれらちもないめつたな事を言ふものでない。

○いろは文章  
い、の變  
はしめて聞も珍らしい  
はんよ命を捨てたとて  
とび老若も目を覺し  
りッばな奴と譽るのは  
るいを以ての集りか  
か、る異變の注進に  
たかいに鎗よ具足よと  
ろり打廻して出達は  
ねもせぬ思案に井伊事も  
らくるい計奥の方  
うむもいはそよ仇討と  
のこる五人の行方も  
くひを持参ぞ云傳  
まもらせ置のも御用心  
ふけの油断のならぬ時  
江戸而已ならそ諸國迄  
あとの祭はどふなるか

めさく他藩もある聞え  
よも早亂に至るかど  
れつ火盛の長刀等  
つねにも優る立派さよ  
ないくど云辻占に  
む念にたへぬ一家中  
お恨よ思ふも無理ならま  
おふくは隠居へ見参よ  
やしきの出入嚴重に  
けに懼しき世の中よ  
こし抜柄と言はれては  
てめを見られて恥しい  
あとの祭はどふなるか

さばいの仕様六かしい  
きよふ上方へ同類が  
ゆきもやせぬかど穿索  
ゆ付の役も大繁多  
み戸へも数人入込て  
しのびくくの注進も  
あどへくくは櫛のはを  
ひくも此以後異變なく  
もどの治國に取かへし  
世間一統安穩に  
すえ泰平の御處置かも

○井伊侯御届風評某甲書簡の抜萃  
一井伊侯の根藉人防方指揮被致中御痛所有之根藉人逃去  
候に付夫を御歸座より而當時御登城御不参之旨即刻御届よ  
相成候と頻に申立候然に御首は金杉通水戸の方へ参候計  
井伊邸へ○○侯を首なしがものいふたとと玉子の四角と  
傾城之職の無ものと云へども卵も厚鏡の四角となり傾城

も誠あれのころ玉の輿にも乗る井伊侯も首無がもの云は  
ころ即日御届にも成將軍家より御見舞之上使が立○○○  
○○致候の定而御大老之事に候への御替首を續だてあら  
ふと申と事に御座候

○吉田松陰郷里への書翰

上家大人玉叔父家大兄書

頑兒矩方泣血再拜、白家嚴君玉叔父家大兄之膝下、  
矩方稟性虛弱、嬰孩以來、連罹篤疾、而不幸遂不死于  
病、制行狂暴、弱冠而還、屢犯重典、而不幸遂不死于法、  
回顧二十九年間、當死者極多、迄今未死、復致父兄今  
日之累、不孝之罪、何以尙焉、然今日之事、關大皇家之  
存亡、係吾公之榮辱、萬々不可休止、古人所謂忠孝  
不兩全者、此類是也、天下之勢、滔々日降、以至于今、其



田蓋非一日矣且以近言之墨使入幕府上假祿約天子聞之不勅停之幕府不遵定假為真列侯之議士民之論一不容幕府天子又下勅召三家大老夫老不至三家則蒙幕貴矣幕府反使老中間部侯上京侯已上京稱病不朝偽言反復謂水戶與堀田西城之議合以故阿附朋比遂為違勅之舉不斬水戶堀田夷事不可理也當今幕府幼冲無所辨識自非大老主之上間部輔之下夫下之事安遂于此哉然則二人者之罪上違天子明勅下害幕府大義內背列侯士民之望外飽虎狼溪壑之欲極天究地俯仰無容然而天下士夫安然默然無一破一艦往問其罪神州正氣既

已為邪氣所消蝕也歟頑兒一念至此食不下咽寢不安寐唯悲一死之不蚤而已頃忽得江戶之報尾水越薩將襲誅彥根太老頑兒聞之距躍三百曰神州正氣遂未消蝕也政府之議固當合從四家鎮壓邪氣也然兒猶有憾焉事出于四家吾因人成功不免于公等碌々之數也是以兒私不自量糾合同志神速上京獲間部之首貫諸竿頭上以表吾公勤王之衷且振江家名門之聲下以發天下士民之公憤而為舉旗趨關之首魁如是而死猶生也然事固不可私為而亦不敢公請趙貫高所謂事成歸王不成獨身坐耳是兒等之志也是以兒等將以某日偕同志請益田行相之

門告故而發不敢求許允政府待以逋亡可也事捷則  
 師旅當繼進不幸不捷他人或死兒則投身就捕明志  
 士憤滿所發決非公家所知也頑兒虛弱狂暴本不  
 在人數中天下反有謬聽虛名認爲豪傑者向以愚論  
 數道致之梁川緯緯竊漬上青雲之上蓋經乙夜  
 之覽云一介草莽區々姓名蒙聖天子垂知何榮  
 加之兒死何晚也近日正三位源公以七生滅賊四大  
 字見賜且傳其世子詩數章望高德望博浪鐵椎其意  
 甚切兒豈可不死哉不孝之子唯慈父愍之不弟之弟  
 唯友兒怨之定省怡々不能復罄膝下之歡願割愛抑  
 友以兒爲死已久矣尋常之親股身体髮膚併以見賜

頑兒之願何以加焉泣血漣々不能竭所思也頑兒矩  
 方泣血拜白十一月六日

平生之學問淺薄にして至誠天地を感格せると出来不申非  
 常の變に立至り申候賑々御愁傷も可被遊拜察仕候  
 親思ふ心にまさる親心今日の昔つれ何とさくらん

去去去年十一月六日差上候書得卜御覽被遊候ハ、左迄御  
 愁傷にも及不申と奉存候尙又當五月出立之節心事一々申  
 上置候事に付今更何も思殘候事無御座候此度漢文にて相  
 認候語諸友書も御轉覽可被遊幕府正議ハ丸に御取用無之  
 夷狄ハ縦横自在に御府内を致跋扈候ハ共  
 神國未地に墜不申上に

聖天子あり下に忠魂義魄充々致候へり天下之事も餘り御  
 力御落無之様奉願候随分御氣分御大切に被遊御長壽を御  
 保可被成候以上  
 十月廿日 隠置  
 家大人 膝下  
 玉大人 膝下  
 家大人 坐す  
 剛北堂様随分御氣分御願專二に奉存候私被誅候共首まで  
 も辨與候入あれの未天下之人にの樂られ不申と御一咲奉  
 願候兒玉小田村久坂之三妹へ五月申世候事忘れぬ様御申  
 聞奉願候與々も人を哀んよりの自ら勤むるを肝要に御坐  
 候○私首の江戸に辨與家祭にの私平生用候祝と去年十二

月六日呈上仕候書とを神主と被成候様奉願候祝の巳酉の  
 七月か赤馬關廻浦之節買得せじ也十年餘著述を助たる功  
 臣也  
 松陰二十一回 狂士とのみ御記奉願候  
 上封に

小田村伊之助様  
 久保 清太郎様  
 久坂 玄瑞様  
 吾の生る者父母也吾の慈る者父母也天下誰人か  
 其親ヲ思ハサラン夫婦ノ相愛慕シ兄弟ツ相友愛スル  
 其ノ法亦綱繆相厚ト爲ス便チ一大緊繩ト開クベシ  
 夫人間ノ性情ヲ具フル者豈ニ能ク初メヨリ之レカ緊繩

大脱セシヤ而シテ慷慨義烈ノ志士ガ國ヲ思ヒ世ヲ憤  
 國ヲ憂フルノ切ナル其心モ亦必ス熱シ邦家ノ事ノ益々  
 急ナルロ及シテ志士心中燃ルカ如ク初メニシテ父母ヲ  
 思ヒ親戚ヲ思フト相率抗シ遂ニ炭然トシテ所謂親戚ノ  
 縲繩ヲ燒燔シ寧ロ一死ヲ抛テ一身ヲ社會ノ犠牲ニ供シ  
 以ツテ國家ヲ救正セントス洵ニ哀マサルベカラズ然カ  
 モ時局ノ此ニ至ル天下其ノ動カノ乖

榎逕居士

○松下塾一燈鏡申合

吉田松陰ノ捕ハル、ヤ門下或ハ之ニ迎坐シ或ハ全ク依  
 ル所ヲ失ヒテ爲メニ散スル者亦少カラズ久坂玄瑞等強

一シ之ヲ憤リ焦心苦慮竟ニ一燈鏡ヲ申合ヲ爲シ斯カレ困  
 阨切至ノ千尋ノ谷底ニ在テ猶ホ且ツ天下ノ憂ヲ除カン  
 トスルニ汲々ヨリキ吾儕今ニシテ一讀如何シテ感激セ  
 ザラシヤ

此度同社中申合せ自分々々の力を盡し骨を折て鎖細の事  
 ながらも相まうけ置たき事に候非常の變不意の急に差懸  
 り候ても囊中拂底にてハ差間ものにて候追々有志人の半  
 獄に繋がれ又ハ飢渴に迫候者も相たどけ度義士烈婦の碑  
 を建墓を築等よも力を盡し手を延し度事に候得とも同社  
 中有餘の金も有まじき事に候得者何れ此方の至誠をのみ  
 貫き度事に候されハ毎月寫本なりともして僅の儲致置度  
 月末松下塾まで銘々持寄可致候半年にもせよ一年にもせ

よ座もつもれり山となる理にて屹と他日の用に相立目途  
に可有之被考候同社中身の膏を絞出して集る事なれり容  
易に費とべきにあらざるやむを得ざる事あれり同社中申合  
の上にて取揃可申候抑人を救ふも用に備るも富貴長者の  
事ならり如何やうにも相叶べけれと我々にてりかくまて  
にそるり貧者の一燈とも申へき事に候至誠のつらぬかぬ  
理のよもあるまじき也依之此度取建候金を一燈銭とい名  
つくる也

一毎月寫本六十枚宛村塾まで必持寄致置候事

一寫本料の先師の定る所眞字十行二十字五文片假字同斷

四文之事

一壹日僅に二枚宛之事なれりさまで勉強のならぬことり

有まじ若此敷不足ある時り一枚の辻をもつて相償必持  
寄可有之候事

右之條々此度申合せ候所是まきの事さへ骨を惜候位にて  
り我々の至誠貫候事も無覺束候標被相考候銘々屹と怠ら  
ぬやう致度ことり申も疎に候己上

酉十二月朔日

松下塾同社中

○關西有志之者廻書之寫

墨夷入港以來深く被爲惱 叙慮伊勢神宮を奉始諸神社へ  
奉幣等厚く被爲在殊に安政五年之春は畏も一七日之間石

清水等へ被爲籠御御所誓候得共時未至京師關東之奸臣之爲に誠忠無二之御方々幽閉御落飾御隠居等之大變事に及び夫のみならず此度開闢以來無例之姫宮様御縁組御下向之事迄に至り叙慮之趣一として奉進候事無之依之今年より限り無上至極之御重禮たる新嘗祭にそら出御不被爲遊候迄深く逆鱗被遊候由傳承仕候其根元は外夷より出て悉皆皇國より生れて人心ある者誰か憤激切齒せざらんや然に當時有名之諸侯は各其本國に引取天下之形勢を傍觀致され候は深慮有之ての事と存候得共右無上至極之御重禮に出御不被遊候迄深く逆鱗被遊候由傳承仕候而者片時も可猶豫時に無之我々微士賤士に候得共國家之爲抛身命京師關東之奸臣を誅し外夷を千里の遠きに退け上は奉休宸襟

下は万民の患を救んと欲すあはれ天下有志之人々不日に尊王攘夷之旗を掲候節の國の爲め君の爲め同心合力して三百年之小思を以三千餘年之大恩を忘る事なく不猶豫狐疑迷に可給出張候以上 西十二月

關西有志之者謹誌

皇國關東誠忠士中

國の爲君のみためとつくし瀉盡そ心は神ぞ知るらん

○三島三郎等斬姦趣意書並ニ懷中所持之書付  
 井伊掃部頭ノ殺サ、ルヤ後ノ幕政ヲ司ル者宜ク應サ  
 ニ鑑スベキノニ然ルニ安藤對馬守ハ掃部頭ノ餘意ヲ繼

キ宿ニ峻メザルノミナラズ益々專横ノ太甚シキヲ極ム  
 下野國三島三郎(本名河野顯三)越後國豐原邦之助(本名河  
 本杜太郎)常陸國細谷忠齋(本名平山兵)同國淺野儀助(本名  
 小田彦治郎)同國吉野政助(本名黒澤五郎)同國相田千之助  
 (本名高島萬藏)同國內田義之助(本名河邊佐治右衛門)等天  
 下ノ爲メニ之ヲ誅セント欲シ文久二年戊辰正月十五日  
 ノ五ツ時頃右ノ三島三郎、豐原邦之助、細谷忠齋、淺野儀助、  
 吉野政助、相田千之助六人密カニ安藤對馬守ヲ今朝登城  
 ノ途筋坂下ニ邀ヘ最初一太刀御駕籠ノ後ヨリ突込ム其  
 針對馬守殿腰骨ノ邊ヘ透ル深カ凡ソ一寸斗次ニ突込マ  
 ル場合ニハ對馬守殿ニモ覺悟セラレシト見エ櫃ヲ身ク  
 レテ駕籠ノ中別ノ一方ヘ臥シ居ラレシニツ上下衣服ヲ

截切り脊筋ヲ縦ニ疵付ケ最早一討ナニセント云フ程ナ  
 リレガ全ク昨年三月ノ大變ヨリ以還ハ老中等非常ニ供  
 數ヲ増シ且ツ孰レモ優レ切ツタル徒ヲ簡ヒケルナレ  
 ハ仲々容易クハ打オ、スベキニアラズ六人ノ者共未ダ  
 對馬守ヲ打果スニ暇アラズ鮮血淋漓身先ツ斃レテ死シ  
 或ハ疵ツキ或ハ捕ヘレ復タ奈ソトモスベカラズ内田儀  
 之助ハ當日其機ニ後レタルヲ以テ自カヲ長州邸ヘ訴ヘ  
 從容トシテ手ツカラ割腹スルト云フ

○

元堀織部正家來當時浪人三島三郎秀全主人織部正先祖堀  
 藤右衛門信世天正十亥年六月於府中初而御目見爲御味方  
 參上夫より御當家十五代様迄十八代爲旗忠勤無恙當織部

正外國奉行被仰付旁以御奉公○○○○奉存候處當時世に  
 動亂異國渡來御交易御廣ク被遊候ニ付世上不穩米穀高直  
 ニ相成ニ付動亂之本と相成候哉ニ奉罷在且異人の心外之  
 及派亂候ニ付先達而主人織部正儀對馬守殿へ御相談被及  
 候處當時御役人様方倭曲之○○殊ニ去ぬる申年井伊様御  
 登城掛ク狼籍およぶ是異人渡來且米穀高直御役人様方  
 倭曲之御方御座候故左様及狼籍候儀ニ付尙々主人へ御相  
 談被及候處對馬殿織部正直言の御取上無之且心外之御換  
 抄御座候旨ニ而退出後心外ニ存切腹仕臣等へ能々被申置  
 候ニハ君辱られ候時の臣死と云へり其由對馬殿御怨申居  
 候處時出來今成年正月十四日相田道育宅ニおゐて條約申  
 合候事 (右懷中所持之書付)

斬奸趣意書

申三月赤心報國之輩御大老井伊掃部頭殿を斬殺に及以候  
 事毛頭奉對幕府候而異心を挾候義に無之權部頭殿執政以  
 來自己之權威而已振ひ奉蕞如天朝只管戎狄を恐怖致し  
 候心精々慷慨忠直之義士を惡み一己之威力を示さんが爲  
 専ら奸謀を相廻らし候體實に神州之罪人に御座候故巨奸  
 を倒候ハ、自然幕府に於るは御悔心も被爲出來向後者  
 天朝を尊み戎狄を惡み國家之安危人心之向背に御心被爲  
 付候事も可有之と存込抛身命候而及斬殺候處其後一向御  
 悔心之御模様相見え不申彌御暴政之筋而已ニ成行候事



幕府之御役人一同之罪には候得共畢竟御老中安藤對馬守殿は第一之罪魁と可申候非伊家執政之時より同腹にて幕政之手傳を被致播磨頭殿死去之後も強而悔悟之心無之而已ならず其奸謀詭計者播磨頭殿にも超過し候様之事件多々有之兼而酒井若狹守殿と申合堂上方より正義御方有之候得者種々無實之罪を羅織して天朝をも同腹之小人而已と致さん事を相謀り萬一忠誠報國之志烈敷手に餘り候族有之節は夷狄之力を借り可取押どの心底顯然と付誠と神明之賦とも可申方候此儘打過候而者奉惱

叙慮候事不及申於幕府も御失體御政事而已成行千古迄も汚名を被爲受候様相成候事鏡掛て見る如し不容易御儀と奉存候其上當時之御模様之如く因循姑息之御政事

而已よて一年送りに被爲過候ハ、近年之中天下は夷狄亂臣之物と相成候事必然之勢御座候故旁以片時も寝食を安んじ難く右者全く對馬守殿奸計邪謀を専らと被致候處より指起候儀付臣子之至情難默止此度微臣共申合對馬守殿を及斬殺申候對馬守殿之罪狀者一々枚舉不堪候得共今其一端と舉而申候ハ、此度皇妹御縁組之儀も表向者天朝より被下置候様取繕ひ公義御合體之姿を示し候へ共實者奸謀威力を以奉豪奪候も同様之筋に御座候故此後必定皇妹を媒機として外夷交易御免之勅詔を推而申下し候手段に可有之其儀若も不相叶節者竊に天子御讓位を奉讓候心底にて既に和學者共へ申付廢帝之古例を爲訓候始末實は將軍家を不識に引入萬世之後迄惡逆之

御名を流し候様取斗候所行よて北條足利にも相超候逆謀者我々切齒痛憤之至可申様も無之候扱又外夷取扱之義者對馬守殿彌増ニ懇懇丁寧を加へ何事も彼等が申處ニ隨候日本周海測量之儀迄差許皇國之形勢悉敷彼等に相教近頃者品川御殿山を不殘彼等ニ貸遣し江戸第一之要地を外夷共ニ渡し候類者彼等を導き我國を取ら末め候も同然之義ニ有之其上外夷應接之後者毎々指向にて密談及數刻骨肉同様ニ親睦致候而國中之忠義勇憤之者共は却而仇敵之如くに差嫌候段國賊と申も餘り有事ニ御座候故對馬守殿永く執政被致候ハ、終には天朝を廢し幕府を倒し自分封爵を外夷ニ受候様に相成候儀明白之事にて言語同斷不屈と可申候既ニ先達而「シイホルト」と申す醜夷に對し日

本の政務ニ携與候様相頼候風評も有之候間對馬守殿存命にては數年を不出して我國神聖之道を廢し耶穌之邪教を奉して君臣父子之大倫を忘れ到處攘奪利欲を尊候筋而已に落入夷狄同様禽獸之群と相成候事疑なし微臣共痛哭流涕大息之餘り無餘儀も奸邪之小人を令殺戮上者奉安天朝幕府下者國中之萬民共夷狄と成果候處之禍を防ぎ候義ニ御座候毛頭も奉對公邊異心を存候儀者無之候間伏而願くは此後之處井伊安藤二奸之逆轍を御改革被遊外夷共を擒逐して  
 叡慮を慰め給ひ萬民之困究を御救ひ被遊候而東照宮以來之御趣意に基き眞實征夷大將軍之御職任を御勤被遊候様仕度候若も只今之儘にて弊政御改無之候ハ、天下之大小

名幕府を見放し候而自分々々之國而已固め候様に成行候者必定之事ニ有之外夷之御扱さへ御手に餘り候折柄右様相成候而如何御所置被遊候哉當時日本國中人心市童走卒迄も夷狄を惡み不申者壹人も無之候間萬一夷狄誅戮を名と致し類を揚候大名有之候ハ、大半其方ニ心靡さ候事實ニ以危急之御時節と奉存候且皇國之俗者君臣上下之大義を辨し忠恩節義之道を守り候御風習ニ御座候故幕府之御處置段々天朝之

叙慮ニ相反候處と見請候ハ、忠臣義士之輩壹人も幕府之御爲ニ身命を抛候者有之間敷幕府は孤立之勢ニ相成果可被遊夫故此度御改心之有無者幕府之御興廢ニ相係候事ニ御座候故何卒此度御捕考被遊傲慢無禮之外夷共を疎外し

神明之御國体も幕府之御威光も相立大小之士民迄も一心合体仕候而尊王攘夷之大典を正し君臣上下之誼を明らかにまし天下ニ死生を俱ニ致し候様御所置希度は則臣等身命を抛奸邪を殺戮して幕府要路之諸有司ニ懇願懇訴する所之徹忠ニ御座候

用紙西の内巻紙美濃紙相懸銘々登通

○三島三郎等七人辭世ノ歌

三島三郎通桓

決心手欲捕搦荆二劍直當百萬兵、成否元來皆天耳、欲留報國盡忠名

まら髪の老を見すて、國の爲めつくす眞心神をまらん  
斃れてもまたおきぬらん我心を、の斃れし盡るとさまで

豊原邦之助親忠

かろいろのそたてし身をも君か爲め

捨つるは世々の恵みと思へば

細谷忠齋繁義

丈夫據護死何悲、成敗在天寧可期、體骨縱消、武州土精神留欲

護皇基

くれ竹のうきふしきけき葉なれども

みどりのいるはかへそやあらかな舞

吹風よあらねとけふは大君の

心にかゝるくもやはらはん

淺野儀助朝儀

吾妻路の武藏の春はたちにしと

雲非におをよ蘆田つるの聲

吉野政助保高

たふれらをきためつくして後やろ

露の命をなとをしむらん

相田千之助胤正

村雲はか、れと君にさるはれて

浮世はなれし月をなかめん

内田儀之助元善

五更月落涼風悲、別母捨兒奈此忠、皇國存亡人不識、斬除奸

賊報、天公

○夢路の日記

大橋順藏名へ正順別ニ訥菴ト號ス江戸之人ナリ宇都宮藩主戸田氏ニ仕フ志氣倜儻讀書ヲ好ミ稍長シテ林氏ノ門ニ遊ヒ後帷ヲ垂シ生徒ニ授ク癸丑以來密カニ國家ノ事ヲ憂ヘ慨然トシテ自カラ寢食ヲ安ンセズ梅風浴雨日夜ニ奔走シ或ハ書ヲ著シ或ハ策ヲ獻シ心ヲ勞スル者極メテ大矣安藤信正カ威權ヲ幕府ニ逞フスルニ及ソテヤ訥庵同志ト謀リ將サニ國家ノ大典ヲ匡正セントス時ニ三島三郎豊原邦之助等竊ニ訥庵ノ密議ニ應ス幕府漸ク其異狀ヲ牒知シ文久ニ壬戌ノ年正月十二日訥庵ヲ捕ヘテ獄ニ下ス是月十五日坂下ノ變アリ幕史屢々其陰謀ノ出ル所ヲ責問シ栲治愈嚴矣訥庵己ニ堪ユル能ハス身体

委瘳困臥數月病益太シ七月七日獄ヲ解キ宇都宮藩邸ニ幽ス訥庵以爲ク死必ス免カレスト乃チ絶命ノ詩ヲ賦シテ曰ク尊王攘狄豈無時、何計危言却致疑、事到蓋棺吾已矣、秋津洲裡一男兒、同月十二日終ニ起キス、其妻若子才學アリ夢路の日記一篇ヲ作ル洵ニ訥庵ノ匹ト云フベク

かけまくもかしこき天皇のおはんめくみは  
 大空よりもたかく海原よりも深うたど志へなくかたしけなきこと  
 此御國も生れあひしともからはあふき奉りてうかおはんじ  
 くいは身をも家をもすて奉らさらんやはと我せの君の常  
 く語らひ給ひてしをいよしとし異國の船の入そめても  
 のかふる事よなりてより世の中やうくおたやかよしも

あらずなり行につけて何事もたどらぬ身にもいかならん  
 うきめかみるどなけくころかな。など安からすうちなけか  
 れ侍りてむねのみうちさわかる、よも明暮に君か代は静  
 けしどのみうたけして遊しむしろまきしのふかな。いかに  
 世の中おたやかにしなしていにしへの都のさまよも直返  
 し奉りてしかなど女のあさきこ、ろよも思ひつゝくるに  
 ましてをどこの君はとしころ學ひのまどよこ、ろひうめ  
 てひしりの道をもをさく、わいため給ひければ天か下の  
 御爲を深うおもひはかり奉りてかゝる世の行末のぞやあ  
 らんかくやと明くれ心をいためはへりて夜るもそからよ  
 枕をやそらいねし夜なくうめさなけき給ひてかのれ人数  
 ならぬ身にはありともなにかはかくていたつらにのみ過

し侍らんいかて御國のためも、に一つも心さしをつくし  
 ておほやけの御政も直なる道に趣け奉りよろつゝの民のこ  
 ろをもやすめてんとやんことなき君の御あたりに密か  
 にふんし文してたよ奉らばやの心思ひおこしつれといま  
 た筆をもえとらそ何計りのこ、ろさしもえ逃けぬあひた  
 よ口さかなき世のならひとておほやけにいとけしからぬ  
 説言（ワザ）をなん言つく者侍りけんわかせをはしめ早うやしな  
 ひたてし子どもまておほやけのひとやよ捕はれ侍りつる  
 は今年文久二とせといふむつき十二日の夜になんありけ  
 るいとおさましうてなみたもえ出す家こそりてなけさか  
 なしめどもかひなしされどおもひ直して中空の霞にまは  
 しくもまども春の光のてらてやまめやとへらさの御國を

おもふまて、ろよ天の恵のなからましや。などつれなし  
 つくりてあるにあくる日家の調度ともたつねさくらんど  
 ておほやけの人のあまた入り來りてうち外まもる人々の  
 敷おほよふたも、たりはかりそわりけるか、るひ、き  
 のけ、しう江戸のくま、まて聞えみちためればおほや  
 けをは、かりてつねにまたしうとふらひまうてこし人た  
 なたえて音つれもなしあさまじさいふはかりなし。人こ、  
 ろか、る折りこそ奥もまらるれ。山河にあらぬものからよ  
 の人のそこのこ、るもくみそまらる。か、る折も鶯のみ  
 朝夕たえそ庭に音つれ侍りければたれこめていつともわ  
 かぬ我宿よ春をまらする鶯の聲。世の人の音つれたえしわ  
 か宿よとふもうれしき春の鶯。されど誠よ心さしふかうも

のそる人はまのひよとむらふはたなきよもあらそなんか  
 くてささらき二十日あまりの日我をとうと歌中の故郷に  
 在りしか同心疑よあひてこれさへからめられ侍りてまは  
 しの程よ我子は何かしの御館へ御あつけどなり侍りぬ何  
 の契よてかう安からぬ物おもひのろふならんと返く心も  
 くれまといつ、今は花の盛をもよそよ聞なしてひたやこ  
 もりにて暮しけるほどに卯月の頃よもなりぬなけきつ、  
 春もきのふとくれ竹のこのうさふしを誰よかたらんもろ  
 ともにかたり合せん折もかな今のうさをもむかしにはじ  
 て。けにいよしへ人の國にも道くしうおこなふ人々のそ  
 の代よ心さしあはされはさまさまのさかしらことよより  
 て罪うることいむかし今よなはめつらかならずいとため

し多かなりこたひのこども兎角の事とりおこなふいう  
 そくのおのか心の引かたよまかせてまひてなきものくさ  
 もおほしてんのこゝろなめりどやうく世の人もいひも  
 てさわくを聞てさかしらの風はふくともくれ竹のすくな  
 るふしのいかて折るへきた、天てらす御神を頼み奉らん  
 ど八百萬神もあはれとうけたまへ我身にかへていのる心  
 を。いかてくど明くれいのり奉りつゝ、あきらかになりあ  
 ん折をまつはとにさつきの頃にかありけんとかく空のか  
 きくもりて雨の音のみ軒またえすいと、しくなかめふる  
 やのさみたれはいつをかきりにはれんとすらんなかめわ  
 ひいと、こゝろもかきくれぬいつをかきりのさみたれの  
 空。久しうまとの戸もおろしてめてあるほどにからうして

さのふけふなん明わさして見出るよいつしう庭の淺茅よ  
 秋風の音つれ侍りてあし夕の露も所得か得なり花鳥の  
 色音もわかつてふる宿よおもひもかけぬ萩の上風。春をたよ  
 ぎらて過よしおさちよ露おきあまる秋は来よけぞ。我袖  
 はけよおどらしとこそおもうよまへしかさるあひたよい  
 うなるさいとひよりありけんこさみおなしつらなる人は  
 十人よもあまりつるよおもう給へかけぬわかせる君頼ま  
 俄よこのぬはたまはやみの世界を出され侍りて我むそ子  
 をあつかり給へましおなし御館よまゐてよけまざるは文  
 月の七日といふ日よなんありけるいとうれしともうれし  
 う夢よやとよとらるゝよこゝろもはらいとやむことなき御  
 あふりのひかりよあふり侍りてとあやしき風の便ようけ



うまゐるかゝしけなさせとき袂よりつゝみもあへすおし  
 こめかゝくてありとたよまられぬ草の下露を思ひもかけ  
 すてらひ月あけ雲のる月の光れてらさひはむなしくさ  
 えんじくらの露いどうれしとおもうまへしは夢はか  
 りの間よて重きいたつきにふじたまひて其月の十日あま  
 り二日といふにわたしたの露も先たちてそきえたまひつる  
 あさましといふも中くよて物もおぼえそくちをしようて  
 皆くれまといぬまして我せの君の教をうけし人々はあし  
 すりをしつゝいかておなし道よもどかなしひなけどか  
 ひなしその中よもかのやかたよはかねて四五人をひゐて  
 みあつかひ侍りしかいとたのみかゝけなるけしきを見て  
 かくなんみそかに告げおこせければむねつふれておぼけ

なきすちといおもへといとまのひよまのひてまうて行て  
 ねたとらよつとよけそひとどかくわつかひ侍りつるよ  
 まいといふささみよかひなくさのみなおもひくしそ今は  
 とまれかくまれあらはならん後よそさわやかよ身の恥を  
 もす、かんでたひやんことなき君のあらたよ天の下の御  
 まつり事す給ふこと、なりよて侍ればさりともおぼん代  
 のあへささま見な得すやうもあらしやん今はことよお  
 もひおく事もなしこよひ過は又のあしたの露よいかてお  
 くれじとさらよみたれたる心地も見ぬすつひよとかなう  
 ひなり給ひてけり武藏野の露ときえゆく人よりもおくる  
 袖のやるかたそなきさ文行もとまるもおなしむさし野  
 比つゆあけ衣はすよしそなきさつるれどかへぬためしの

ふち衣なみたよ今やくちんとすらんまことやいよし年も  
 天の下の御爲よと必をつくしまもの、ふれ幾よりとなく  
 あさましうなり行しを思へは今はなほさしもなけうしか  
 る世に物思ふ人は我とりりやはよそことよき、てもま  
 ほる衣手はいまわか身のうへよさりけるまた御國おも  
 ふ人の心をいふなればまらけはなる八百萬神、いとうら  
 めしうて神をさへうらみ奉るへうおもひなま侍るも且は  
 ろしこしや今は明暮よそのかこのおこなひをのみやくよ  
 て過しつるよ其月の廿日あまを五日とといふよからうし  
 て弟の教中も例の御館よ御あつけとなま侍りつと聞よ少  
 しのなけきもとりかへされて慰むとはなけれど山松れか  
 さ枝のよしやかれぬとも残るまけみを蔭とこのまん。とま

のひつ、かふみよせうそこして平らるよ物まつるをこよ  
 なき悦ひにおもひかはしつ、ともかうも此人ひとりをと  
 よされもしきものにして我子どもの行末もこのみさこ文  
 ぞやと思ひつづくるよいかなる禍津日わざのた、りよか葉月  
 七日といふにまた俄よやみの、しきて八日といふあつ  
 きよ此人さへそとらなくなり侍ぬるは夢よ夢みして、ち  
 のみしてくちをしようなましきこと物よ似す人々のかして  
 ういさめ給ふを聞てや、みたり心地もおさまりよたれど  
 備うつ、どのさらよくおもひもわかす夢ならばとくさ  
 めよかし此うさをのちれうつ、のうことにいせん。またせ  
 まぬへぬ涙のまたしひねのみ満てぬ袖はぬきんともせ  
 すまらなりさともよかたらんうきことも我身ひとつよつ

もるものどいといと、わるよもあらぬ身はすくせのつたな  
 さはなくさめんかゝなけれとまたや、おもひかへして君  
 かため世の爲め思ふもの、よれ清き心は神を知るらんか  
 のつからうつるよよりもふく風もちりてそ花はよもを  
 しめる今はいふよ思ふともひなきこと、我はわれとお  
 もひさましてもとへるへけれとふるさとよおとする母君  
 けなけい給ふらん何といふよどおしとあられてあこれに  
 も心苦しくもいかにこしらへてのなくさめ聞えんと只千  
 代までもなほなからへてひこはえの小松か末を見そなと  
 せ君今よりは根さしもことよ生出む二葉の松のすゑをこ  
 そまで、こゝら物せるをたよおはしたてさせたまへなど聞  
 えやるものから尙折々は馴なへて歸る日いつとともそれ

335854

はなきもわすれてまつのはねなきか、る何とよ故郷より  
 どて消息あるよとる手もこゝろもとならふんしめときて  
 涙も目も見えぬをよとるくうち見れば母君もよひらか  
 んていとかしこう武さもの、ふといへともえも及びうた  
 うありかよさまてを、しう何事も世の理を深う思ひとり  
 て物し給ふよ少しは心もおちるはへりぬやうく思ひつ  
 くるに誠よ此二人のくいとつらよなり行しそのもとは  
 国のみためをひよすらよおもひあまれる心よりさる  
 いみしき事のさまよもなりよて侍れば色をも香をもま  
 りよまかせても、とせののちもくちめやかくとしき名は  
 たち花のよちかきぬともうきことば夢となしてもと、め  
 置名は幾とせもさめすあらん天翔るたまのゆくへい九

重の御階のもとを猶やまもらん。なとか、るとかなしこと  
 を手習のやうよるいつけつるを心やりよてうき月日を過  
 しつるま、又閏八月の廿日あまり七日といふよからうし  
 てことあきらかよさわやきてわる子もゆるされ侍りて歸  
 りまうてくるようれしきものゝら先むねうちふたかりて。  
 うれしさよつけていまさらかなしさの又立かへりぬる、  
 袖かなか、るよつけてもあらしかいたくちをしき事と  
 た多加れととまれかくまれかうひとりたよつ、あなうて  
 歸りつるよるこひよせめてなくさめ侍りてなほゆく未此  
 なき人々の心さしをさしつくらんをのことも侍ればさり  
 とも取返しつへさよもあらしやいとせめてねんしてたの  
 みおもふもいとはかなしや頼みこし二木の松れかきしよ

りその若はえれ未そまたる、又あるときなき人人のこ、  
 らのとし月あいつけ置給へるふみどもを見あつめておさ  
 てまゝたれかしのはんなかれてのよよもたえせぬこれの  
 水くさ流れての世よもつたへん武士はよこらぬ心水くさ  
 のあと

○ 姫宮の此大城のもとよ下らせ給ふをいたみ奉る  
 歌並短歌

かけまくもかしこはれどもやすみし、我天皇の高光る。そ  
 の姫みこのいかさまよ。おどほしめせる。九重のみやこをお  
 きて。あまさかる。東の國を常宅と。定めまつらす。あらしよ。  
 さくそうれたき。御門出よ。思へばゆ、し。ぬは玉の。夜のまの

ゆめ。うつゆふのうつ、よのあらし。さりとても。うらたの  
 みてし。かひもあく。さのふよけさよ。諸人の世にかたりつき。  
 いひつくを。聞は誠か。唐土よか、みのかけよ。うらみつ、古  
 き都を立山けん。その古も。今さらよ。思ひこそやれ。まかひあ  
 れど。それのこど國。かしこくも。この安國は。すへらさの。まら  
 す御門を。神世より。かゝるためしは。なよ竹の。世は末なれや。  
 まかつるの。神のまわさの。およつれの。まうこと、かも。村か  
 もの。心をいたみ。よるひよも。時も定めす。久方の。天つみ空を  
 打あふき。なけくおきその。さかりさへ。みつるをりしも。くも  
 る日のかけ。かしこくも。さその。あらし山こえ  
 まさんとは

かしこくもけふ九重に御門出よなけかさらめやとろつ民  
 くさ

○筑前肥後民平野二郎密奏

謹而奉密奏候當時天下之形勢漫々として黠夷外より逼り  
 滔々たる大姦内に誇り天機之安からざる事譬の人體に癩  
 疽之兩疔を醸し候如く實に國体之存亡命脈之斷續此時に  
 御座候明よ今更申上候迄も無御座即 叙覽之通に御座候  
 然に又當月華庫堺之三津之開港期約仕居候由若此三所開  
 港に相成候ハ、例之商賣と號し城郭様之ものを修補群虜  
 を屯せしめ軍艦を繋ぎ礮臺を構水陸を要塞し候に於てハ

神州中絶之像に而譬の龍蛇之胸中を切られたる如く首尾  
 變化應援之道堪難く乍恐 鳳閣之御危難累卵より甚敷万  
 一其頃に建候而者外寇攘斥之策も御施無術手を束て左楯  
 壁文之風に變し乍居腥羶之正朔を受候外所置有御座間敷  
 儀鏡に掛候より明かに御座候右に付兩三年殊に心配是非  
 々々共當奉迄よの義旗決舉不仕而の不相成義と鎮西之勇  
 士を密々結義御座候得共義徒烏合計に而僅數百人計に而  
 志を不通而已ならず却而後害を引出し候様に至り申問敷  
 哉に付必一天諸侯を汚憑して不叶事と因循仕候内 皇女  
 様關東御下降に相成乍恐於幕府國學に申付忌々敷御先例  
 をも取調候様脱漏暫時暴虎馮河之機に至候も難計彼是天  
 下有志之者共扼腕憤激仕義氣十分震立候機節等顯候に付

既に去年十二月一書携へ薩之關所を犯し鹿兒島府に入込  
 み申候處一藩案外奮起仕申候一封の修理大夫實父島津和  
 泉に達し候其比同藩にの當春修理大夫出府候處を延引二  
 而當秋にも可相成勢に御座候處俄に其義草り修理大夫爲  
 名代和泉出府と申事に決し即此節上京之處ニ至り申候如  
 此薩之一國舉て 勤王之義相決し西海山陽南海之有志如  
 此奮起或の亡命脱藩上坂仕京攝ニ潜住居者も數多有之實  
 に止に不可止の勢にて必死奮決を以是非に此度の大舉し  
 て恢復之基を開合に御座候斯迄人氣奮立候大機會者は迄  
 未有所よて千万世之一時に御座候若此機を遊候而者勝を  
 嚙ども詮なし不可有再來一機に御座候一旦此決發仕候上  
 者悠々不聞之所に落候心遣の毛頭無御座候得共同敷の決

舉仕候中ニて上策に出候への力と勞せしめて有功十分に御座候若下策に落候への無功而已ならず却而後害を醸候儀も有之儀に御座候夫故乍恐神武不思議之 叙決を以第一に出候様有御座度差當一忌よ手を下候處の三策誠左に認候而奉備 天覽候而聖斷奉仰願候

一 島津和泉藩坂中倫命下り直に華城を拔彦城を火し條城を屠り同時三勢を卒して和泉上京幕吏を拂ひ青蓮院宮之幽閉を解き參殿之上 鳳輦を促し蹕を華城に遷し奉り皇威を張て以七道諸侯に命を下し幕府之罪科を正し前非を悔罪謝候時の官職を削き爵祿を削り諸侯之列に加へ若命に反時の征伐をるを上策とす

一 和泉上伏之上 命下り上京直に幕吏拂ひ宮之幽閉を解

き條城を拔きて是に遷り宮を奉して幕罪を正し是を中とす

一 和泉出京近衛殿陽明家に參殿之上漸決議に而幕吏を拂ひ幽閉を解き條城を拔て是よ寄官軍を募り 皇威を張り以幕罪を正し幕府を扶け尊攘を謀る者是を下とす

右三策之外凡而公武御合体夷狄攘斥と申説は根元始息平穩を好候不斷慮之胸臆より出候處にて假令事行はれ申述も十分之落着は無風東五大洲之果迄も 皇威を輝万々歳神州安全之基は發申問敷御合体機會の既に五年前に在て即家族より尾水越外侯より土因薩之如き英傑之面々計○

○整さりし覆轍にて其後益衰弱究たる幕府を憑攘夷を策候の古今天下之愚策にて勢決して行はれ問敷殊に如此醜

虜と親睦仕居幕府に御諂ひ御合体之儀の矢張外夷へ御合  
体も同様に今より三年も過去候中に座ながら腥羶之  
屬國と成果候の必然かと奉存候此度の一際抜群之、叙斷  
を以海内蒼生之弊心一洗憤發仕候様、叙志を勵まされ  
皇國之存亡乍恐、玉体之安危此一舉に御座候への何本し  
て第一等之上策も出候様神速に、天決奉仰願上候誠恐誠  
惶頓首敬白

文久二年四月八日

筑前脱民 平野二郎 國臣印

○浪士共石清水への願文

石清水大神之大前に誠恐誠惶謹而祈願言上す微臣等合力  
同心而群集泣祈仕る所之赤心廣大之、神徳を以洞察し給  
ひ仰而哀憐納受仕給はん事を百拜頓首而奉希候抑此度恐  
多くも、皇居御近く群在仕候義の、大神も知食給はんか  
如く近來奸臣賊子之爲に奉惱、震裏事重疊至極せり、皇  
國之臣民さるもの誰か悲泣憤激せさらんや爰に微臣等思  
慮そらく、皇祖神建國以來數千万歳、御國恩を奉戴仕合  
御大事と乍奉存傍觀仕候而の臣民さる道不相立と存詰悲  
泣之涙片時も不能止尙此時不奉報御大恩の何の時をか期  
せんと各國申合上京仕候義に御座候其故の、朝廷に迫り  
奉頌、叙慮候奸賊を誅戮し次に夷賊を万里に討罰し凜  
然さる、皇威を万里に奉輝四夷八蠻をして悉く伏從獻貢



せしめて上の奉安。宸襟下の公武之万民を救ひ長く天下  
之泰平を期せんと欲するの志誠。御座候伏而願くは。大  
神受顧之神恵を垂れ給ひて此微衷を慰み大業を不日  
成就せしめ玉へと泣血切齒之至に不堪誠恐誠惶百拜謹言

成四月

守 護 士 共

報國纂錄卷之三

○壬戌五月公卿被仰出候勅定

朕惟方今時勢夷狄恣猖獗。幕府失措置。天下騷然。萬民欲墜塗  
炭。朕深愛之。仰庇祖先。俯恤蒼生。而幕吏奏曰。近來國民不協和。  
是以不能舉廢憊之師。願降嫁皇妹於大樹。則公武一和。而天下  
戮力以掃攘夷戎。故許其所請焉。而幕吏連署。曰十年內必攘夷  
狄。朕甚喜之。抽誠祈神。以待其成功。昨臘和宮入關東也。使千種  
少將。岩倉少將諭天下大赦之事。且告曰國政仍舊。大概委於關  
東。至如外夷之事。則我國一大重事也。係其國体者。咸問朕。而後  
定議。或使二三外藩臣。預聞夷戎之慮置。幕吏對曰。宸意事甚重  
大難。遽奉行。請暫猶預。既而頃日列藩有獻謀讎者。如薩長二藩。  
殊新來奏事。且山陽南海西國之忠士既蜂起。密奏曰幕吏奸徒

日多。正義委地。而戡王家。陸夷戎。物貨溢。出國用乏耗。萬民困弊之極。殆至受夷戎之管轄。不日而可知也矣。冀舉旌旗。奉鬻與函。饋。誅幕府之姦吏。或曰為除天下浸潤游惰之弊。誅京師之奸徒。又曰不願幕府下攘夷之令於五畿七道之諸藩。如其衆議畢。雖出於忠誠愛國之至情。事甚激烈。使喻薩長之輩。鎮壓其他。召幕府老吏久世大和守。往復歷日未告唯諾而先行。昨臘所喻之大赦。夫大樹猶弱。何失之有。但幕吏因循偷安。撫馭失術。如是則國家傾覆可立而待也。朕日憂懼焉。所謂偷一日之安。忘百年之患。聖賢之遺訓可鑑矣。當內修文德。外備武術。斷然建攘夷之功。於是斟酌衆議。執守中道。欲使德川與祖先之功業。張天下之綱紀。因策三事。其一日。欲令大樹卒大小名上洛。議治國家攘夷戎。上慰祖先之震怒。下從議臣之歸嚮。啓萬民和育之基。比天下於泰

山之安。其二曰。依大開之故典。使沿海之大藩五國稱五大老。為咨。決國政。防禦夷戎之處置。則環海之武備。堅固確然。必有掃除夷戎之功。其三曰。令一橋刑部卿。援大樹越前前中將。任大老職。輔佐幕府內外之政。當不受左袒之辱。是萬人之望。恐不達。朕意決于此三事。是故下使於關東。蓋欲使幕府。選三事之一。以行也。是以周諮群臣。無所忌憚。各啓沃心丹。宜奏謬言。

壬戌五月

○文久二年五月十二日關東勅使ヲ以三々條之勅  
諭被仰下候ニ付詔書ヲ以公卿以下ニ存意御尋於

禁中議表列座拜見被仰付思召書

夫聖人ニ非サルニモリ内安ケレハ必外ノ患アリト方今天下  
 二百有餘年至平ニ慣レ内遊惰ニ流レ外武備ヲ忘レ甲冑朽  
 廢シ干戈腐鏽ス卒然トシテ夷狄ノ患起テ不能應之終ニ癸  
 丑甲寅ノ年ヨリ有司益駕御ノ術ヲ失シ事機稜多シ是ヲ以  
 テ戎虜不知所恐懼求徵厭條約ヲ定メ開市ヲ通セシテ請  
 フ幕府因循不能拒其請以旗下小吏奏請朕知其誣罔斥之翌  
 巳年二月幕府以老吏堀田備中守及二三小吏登京事情ヲ陳  
 シ切請不止朕熟案古今夷狄之憂雖不少近年ノ如ク甚シキ  
 ハ未有之心若一旦親狎之膺流穢張神州陸沈シ朕カ世ニ至  
 テ初テ全區ヲ缺ハ何ヲ以テ先皇在天之靈ニ謝セント深謀  
 遠慮シ群臣ニ咨詢スルニ皆其不可ナレトテ白ス又列藩内  
 密思言ノ者不少乃幕府ニ命シ天下ノ大小名ニ命シ各々時

宜ヲ陳セシム然ルニ幕府命ヲ拒ミ肯テ之ヲ天下ニ傳示セ  
 ス朕深シ憂慮シ未ク處置スレト不有於是群臣八十八人奮  
 然トシテ奏狀シ以テ朕カ意ヲ贊ス又或曰朕若シ幕府ノ請  
 ニ不從ハ必承久元弘ノ事ヲ爲ント然レハ朕何ソ一身ノ事  
 ヲ以テ祖宗ノ天下ニ易シヤト卒ニ重テ命スルニ前令ヲ以  
 テテ次テ幕使ヲ返ラシム又使ヲ發シ幣ヲ三社ニ奉シ戎虜  
 ノ國体ヲ汚ストナク人民其生ヲ安ンゼンコトヲ祈請ス庶幾  
 ハ弘安ノ先蹤ヲ繼ント豈圖ラシヤ旬日ノ間幕使朕命ヲ不  
 用遂ニ條約ヲ定メ通商ヲ許シ片紙ヲ以テ奏シテ曰時勢切  
 迫不得已事也ト朕殊ニ其侮設非禮ヲ怒ルト雖レ未遽コ之  
 ヲ讓責セズ三家家門或ハ大老ヲ召シ其子細ヲ尋糺セント  
 ス然ルニ尾水越其餘二三ノ名藩臣ヲ籠居セシメテ又嘗テ

命ヲ不奉次ヲ前將軍薨セリ又忠言スル者アリ曰嗣子幼若  
將軍ニ任スルコトナク暫其爲ス所ヲ見テ而後任之ヨト然レ  
モ直ニ其職ニ任シ其ヲ以テ其職ヲ盡サシメントス然ルニ  
將軍幼若有司柔情朕意ニ禰フコトヲ不知嘗テ攘夷ノ念ナク  
却テ之ヲ親昵シ刺ヘ正議ノ士ヲ排斥ス朕其三家三卿等ヲ  
召セ共不來刺ヘ正議ノ名藩臣ヲ退隱或ハ禁錮セシメ其積  
鬱ノ餘激シテ變ヲ生シ外夷其虛ニ乗セシコトヲ憂慮シ特命  
ヲ幕府水府ニ下シ天下ノ大小名同心戮力幕府ヲ補助シ内  
奸更テ除キ諸藩勤王ノ心ヲ慰シ外黠虜ヲ攘ヒ各國覬覦ノ  
念ヲ絶セシメントス然ルニ皆朕カ意ヲ体シ其命ヲ海内ニ  
傳示シ天下一心戮力徳川ヲ補佐シ外夷征殄ノ儀ヲ不與知  
テ公武不和ノ難ヲ醸シ朕深ク之ヲ憂フ其間事々紛々盡ク

言フベキコト難シ然レモ其一ニ言フニ人々以爲テ幕府  
如此衰弱不振戎狄如此猖獗不懲然則外患何時止シ神州正  
氣何時回復セシメ人民何時生チ安セシメ是豪傑英雄ノ將ニア  
ラスノハ治ルコト不能ト三家ノ中一橋ハ其英雄ナルヲ以テ  
之ヲシテ其職ニ當ラシメハ寧能ク大事ヲ成就セシト是ヲ  
以草莽有志之士其事ニ周旋奔馳スル者アリ又其間狂猾其  
意ヲ快クセントスル者アリテ事多朕意ノ如ナラス不日ニ  
シテ間部下總守登京幕命ヲ以テ天下ノ事ヲ論スル者一切  
ニ縛収シテ之ヲ江戸ニ下シ次テ四大臣落飾幽居シ正議ノ  
士是ニ於テ盡ク下總守幕議ヲ白シ曰條約押印ノ事ハ先役  
備中守ノ所爲ニ當役ノ知ル處ニ非ス即今條約ヲ返シ通  
市ヲ止ルルハ外國ニ不信ヲ傳ヘ彼カ怒ヲ激シ異變不測ニ

生セシ環海武備未タ充實セス且大奸内ニ在リ若外患起ラ  
 ハ内憂之ニ乗セシ然ラハ忽チ天下土崩瓦解如何ノハ爲ス  
 可カラサルニ至ルベシ希シハ幕府ノ申ス處ニ從ヒ姑ク天  
 下ノ時勢ヲ覽セシコト必不經年シテ戎虜ヲ掃絶シ神州ノ  
 正氣ヲ回復セント是以後不得止事枉テ其請ニ任セ以テ天  
 下ノ事勢ヲ見ル其後庚申年三月三日水府浪士井伊掃部頭  
 ナ刺スノ事有リ其所爲ハ亂暴ニ似タリ且其所懷中ノ狀書  
 ナ視テ其意ヲ察スレハ深ク外夷ノ跋扈ヲ憤怒シ幕府ノ失  
 職ヲ死ヲ以テ諫ルニ在リ是朕カ嘗テヨリ所憂也又其後年  
 墨使ヲ刺シ又東漸寺ノ件ニ皆其意斯ニ甚ツケリ其餘外夷  
 ノ陸梁ナル對州ノ事ニ少國相理ノ事兵庫ヨリ陸行江府ニ  
 到ルノ事海岸測量殿山ヲ借與ノ事等朕ニ幕府ニ其然ラ

サルコト責レテ幕吏奏曰是一皆時ノ權宜ニシテ浪華開商  
 延期ノ術策也ト又奏請曰外夷ヲ掃殄スルコト天下一カ戮心  
 ニ非ンハ爲シ難シ故ニ和宮ヲ以テ將軍ニ尙シ以テ公武一  
 和チ天下ニ表シ而後戎虜剿絶ニ可及也不然ハ公武ノ間チ  
 隔絶セントスルノ奸賊アツテ外夷拒絕ニ及ヒ難シト朕念  
 フニ先帝遺腹ノ妹ヲ以テ百有餘里ノ外ニ嫁シ而カ古來未  
 曾有ノ武臣ニ尙セシコト朕カ意實ニ忍ヒサル所也然ルニ幕  
 吏切ニ内外ノ事情ヲ陳謝シ朕カ憐ヲ請テ不止朕モ意ニ不  
 忍ト雖ヒ祖宗ノ天下ノ事ニハ代々難シト意ヲ決シテ其請  
 ナ許シ十年ヲ不出必然外夷攘除ノ事ヲ命シ且海内大小名  
 ニ朕意ヲ傳示シ武備充實セシメントス幕吏逆署奏狀シ皆  
 朕カ命ヲ聽シ故ニ法冬和宮入城ノ事ニ及ヘリ然ルニ今春

ニ至リ幕吏安藤對馬守浪士ノ爲メニ刺サル是等皆捕部頭  
 ナ刺セシ者ト同意ノ者ニシテ如是輩ハ死ヲ視ルニ歸スル  
 カ如ク實ニ勇豪ノ士也嗚呼此輩ヲシテ少シク其憤鬱スル  
 所ヲ伸ヘシメテ論スニ丁寧誠實ノ言ヲ以テシテ暫ク其勇  
 氣ヲ儲ヘシメ他日非常ノ變ニ用ヒ其ヲシテ先鋒ヲラシメ  
 ハ堅ク衝キ銳ク挫スルニ於テ何ノ難キヤカアラソヤ誠ニ  
 愛シムベキノ士也幕府意ヲ斯ニ不着日夜猶其餘黨ヲ探リ  
 索ルヨシ是惟フニ怨ヲ天下ニ播ヘテ事ニ於テ益ナク其本  
 ニ反ラズシテ只々威力ヲ以テ制セントセハ是ヲ捕シハ又  
 斯ニ生シ天下ノ變止ム時ナク終ニ大變ヲ激生スルニ至ラ  
 ノ是朕カ深ク憂慮スル所也聞ク翌十六日將軍拜廟ノ事ア  
 リ有司前日ノ變ヲ以テ拜廟ノ事ヲ延引セント謂ヘリ然レ

ニ將軍嘗テ拜廟ノ事ヲ不廢ノ之ヲ行ヘリト朕其寬量ヲ愛  
 シ因テ思フ庚申三月以來九門外ニ守兵ヲ置キ又關白邸亭  
 ニモ兵士ヲ置キ或ハ參朝ニ密ニ武士ヲ具シテ非常ニ備フ  
 ト是等朕カ深ク慚憂スル所也因テ又思フニ往年三社ニ奉  
 幣セシ以來神州ノ汚穢ヲ洒掃セシテ朝夕禱請シテ不怠  
 又法樂至今猶之ヲ行フ庶幾シハ以テ前ノ志願ヲ全フシ之  
 夫終ラント去年元ヲ改メ天下ト共ニ更始ス公主既ニ尙シ  
 公武實ニ一和ニ此時ニ迫リテ既往ハ咎メサルノ教ニ由リ  
 天下ニ大赦ヲ三大臣ノ幽閉ヲ免シ列藩臣ノ禁錮ヲ赦シ有  
 志ノ士ノ連坐セシ者ヲ放シテ速告幕府以テ此舉ヲ行ハ  
 シメヨ是朕所深憂也而後天下ヲ合セ力チ一ニシ十年内ヲ  
 限リ武備充實セシメ斷然トシテ夷虜ニ論スニ利害ヲ以テ

一切之ヲ斷絶シ若不聽ハ速ニ唐僊ノ師ヲ舉海内至力  
 ナリヲ入テハ守リ出テハ制セハ豈神州ノ元氣ヲ恢復セシ  
 ニ難キコト有ラシヤ若不然シテ惟ニ因循姑息舊套ニ從テ不  
 改海内疲弊ノ極卒ニハ戎虜ノ術中ニ陥リ坐シテナカラ膝ヲ  
 犬羊ニ屈ノ殷鑑不遠印度ノ覆轍ヲ蹈ハ朕實ニ何ヲ以テカ  
 先皇在天ノ神靈ニ謝セシヤ若幕府十年内ヲ限リテ朕カ命  
 ニ從ヒ唐僊ノ師ヲナサスハ朕實ニ斷然トシテ神武天皇  
 神功皇后ノ遺蹤ニ則リ公卿百官ト天下ノ牧伯ヲ帥ヒテ親  
 征セントス卿等其斯意ヲ躰シ以テ朕ニ報セシコト計シ  
 文久二壬戌年五月

○勅使大原卿へ

叙慮

朕國家の爲日夜うれひさえそして幕吏尙も安ららん事を  
 ぬすむ仍而今汝を關東へ下してあまねく朕か固有の志を  
 宇内にまらしめんと欲願くハ汝が腹心を以て忘る事ある  
 となられ且營中廟論之日万一幕吏曲直をあやまり島津と  
 爭論も及ん事も計かさく然則汝大道をもつて是非をさど  
 し天下の一大事をあやまる事なかれ今日の事朕一に汝よ  
 ゆたぬ汝つとめて 祖神の震怒をなくさめよ

○島田左兵衛梟首之圖

七月二十三日朝三條下ル加茂川原に梟首致しめると云ふ

此島田左兵衛權大尉事大惡逆水野主膳

内腹い

よ



し不謂奸  
曲を巧み  
不容天地大逆賊也依之加誅戮令梟首者也

文久二成七月 日

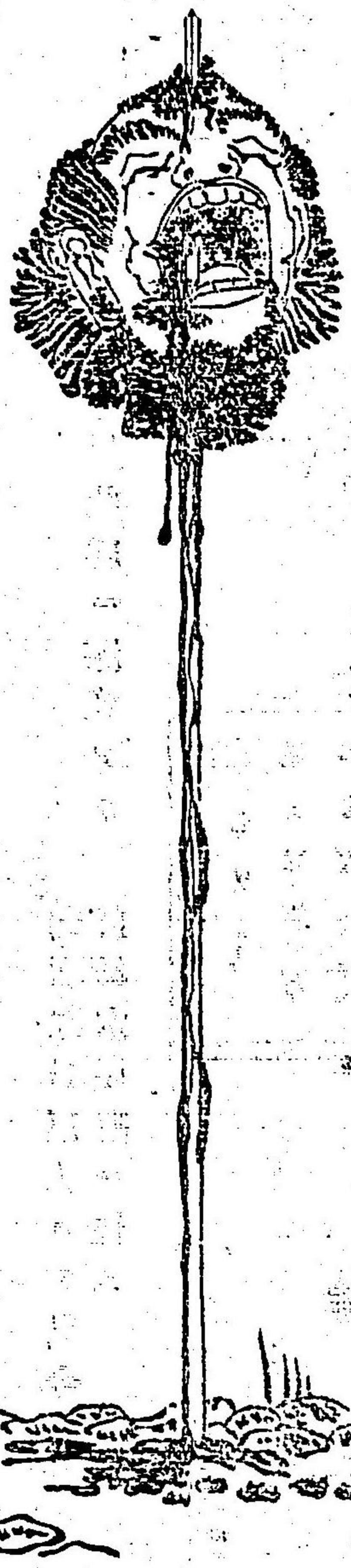
○宇郷玄蕃梟首之圖

四條五條之間松原通の河原にさらし有之其首  
玄蕃が所持の立派なる槍にさし有之前玄蕃頭  
と云ひし者の由

副 文

九條殿御内  
宇郷玄蕃

此者儀島田と同腹致主家をして不義に陥らしめ



候罪彼方重し依之加天誅者也

壬八月二十三日



○江戸浪人某梟首之圖

四條川原にさらし有之骸ハ高瀬川四條上ル處に没有之由

罰文

此處ニ深疵アリ

此者江戸浪人コテ只今  
京都木屋町ニ住ス

此者罪狀今

更申迄も無

之第一虚喝

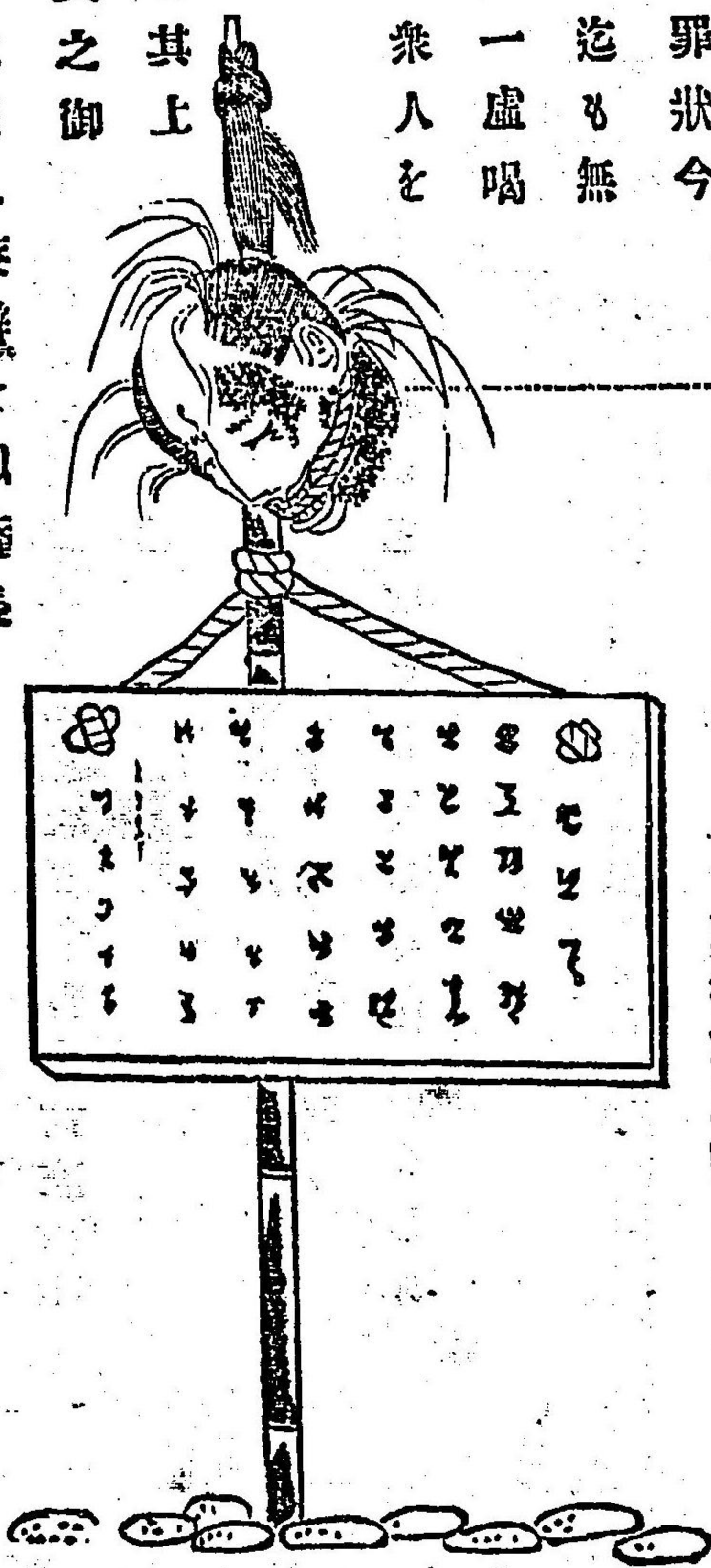
を以衆人を

感し其上

高貴之御

方へ致出入佞辨を以薩長

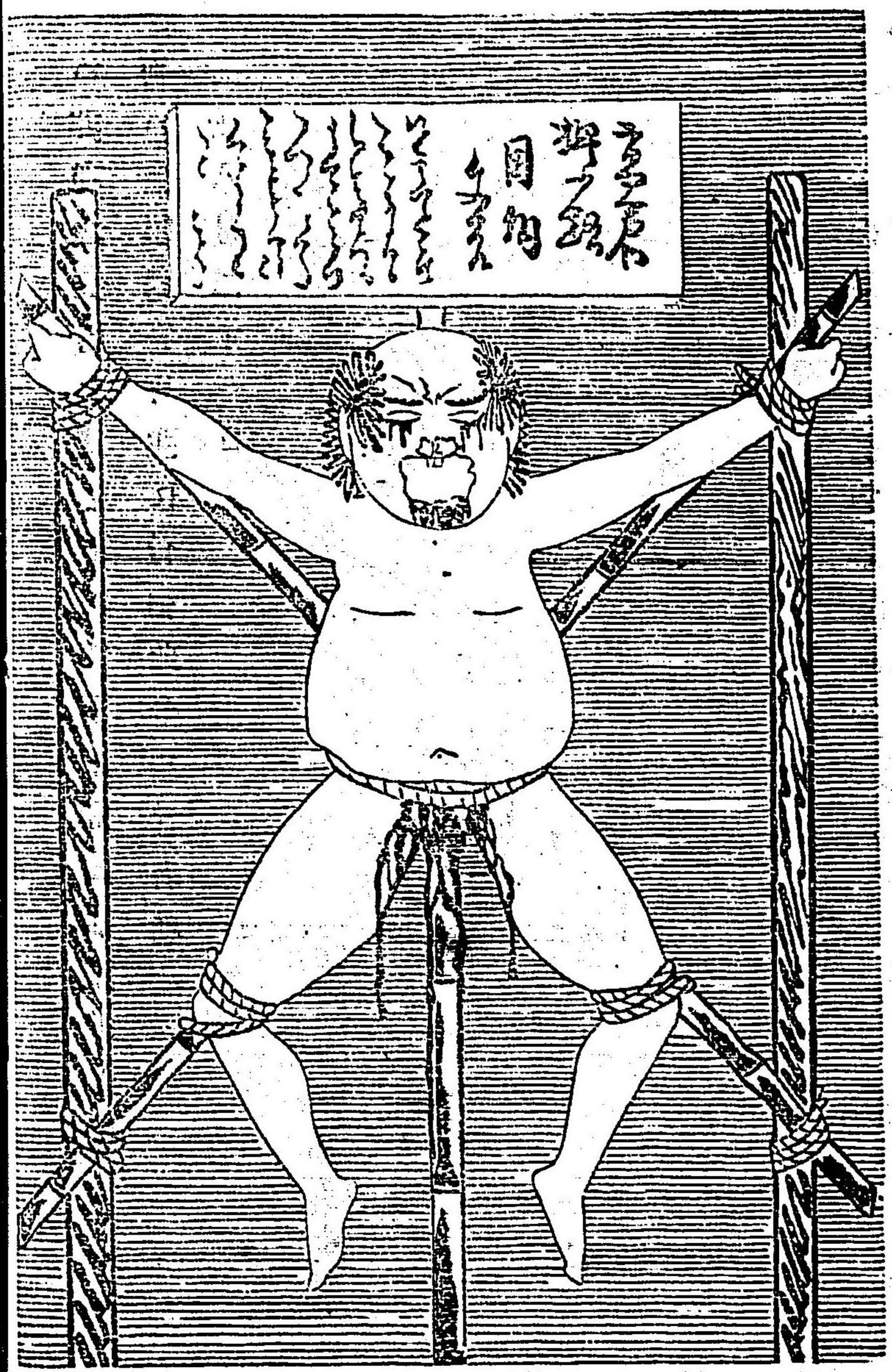
土之三藩を様々致讒訴有志之輩を離間し奸謀を相巧み或



ハ非理之貨財を貪と取其外不謂奸曲難盡筆上此儘指置候  
而ハ無限禍害可生に付如此命梟首者也

壬八月二十一日

○目明シ文昔梟首之圖



文久三年壬戌閏八月

右之者先年島田左近は隨從し種々奸謀手傳いたし利戌  
 年來姦吏之徒に心を合せ諸士之面々を爲教苦痛非分之  
 賞金を貪り其上島田所持いとし候不正之金子を預り過分  
 之利足を漁し近來に至候而猶又様々の奸計を相巧み時勢  
 一新之妨に相成候に付如此加誅戮死骸引捨にいとし候同  
 人死後に至右金子借用之者決而不及返濟候且又以後逆も  
 又吉同様之所業相働候者於有之身分之高下は不抱即時に  
 可令誅戮者也

文久三年壬戌閏八月

...

○九月十二日夜投ケ文寫

富小路前中務大輔殿先年要路之奸吏一阿從し天威を傾け加之和宮御東下千古未曾有之大恥辱を醸し成候處天運挽回今年より至り勅勘を蒙る上此度改心可有之處猶貪慾有道之朝廷を亂さんと種々密議を爲し調伏鳩毒等之關度有之由今其詭路頓高し依之早速跡込み可加天誅之處朝廷之罪威に憚り暫猶豫及候へども頃日に至候而者猶豫之儀難相成衆議一定に候雖然出格之恤を以明十三日十四日中に洛中を立退候よ於て自後其分に可差置若其儀無之者首級を四條磔に晒し家族可令無遠類者也  
 岩倉久我千種富小路今城少將内侍堀川衛門内侍  
 以上六軒共同文言の投文有之由

○西筑右衛門外三名罰文寫

松平修理太夫内

西筑右衛門

町與力 渡邊金三郎

同心 森 孫 六

同心 大川原十藏

罰文

右戊午年以來長野主膳島田左近之大逆謀に與し加納繁三郎上田助之丞等二人諸奸吏共と心を合未曾有之御國難を醸し聊にても國事を憂候者共の悉無名之罪を羅織し甚に至而者配流之嚴刑を用ひ已れ毒計を逞せんと致候天地不可容之罪狀不遑枚擧仍之加天誅者也

壬戌九月二十三日

○永野主膳妾並に多田帶刀罰文

此女永野主膳妾にして成年以來主膳之奸計を相働稱成大  
膽不敵之所業有之不容易罪に候へども其身女子たるを以  
面縛之上死罪一等を減し尤うすへ白狀し寄て奸吏之名目  
一々記し畢ぬ此上主膳方再應遂吟味右奸吏ども逐一可加  
嚴刑者也

十一月五日

多田帶刀

多田帶刀義島田左近加納磐三郎永野主膳と互に奸計相働  
第一戌午の歳より至有志之徒之書翰令開封渡邊金三郎に相  
渡候より事露顯いとし終に愛國赤心之者共一時に地を拂  
に至る其罪實に天地不可容其餘逐一白狀之條々不可枚舉  
依而一端を舉加天誅者也

十一月六日

右三條河原に有之

○浪士借金文

草莽深浪ノ士天下ノ憂コ先ツテ憂ヘ。危キヲ犯シ  
テ義ヲ思フ家ヲ捨テ産ヲ破リ一身洗フカ如キニ

至ル者固ヨリ不得已也即チ此書ノ如キ者以ッテ

維新前節ノ概ヲ見ルベシ

一拙者共義此度爲皇國奸曲之輩を討〇し上下之人心を  
して正道よ進ませめんと親戚之正きを捨家産を破り困  
窮今日よせまり候處如貴所富人之力をからずして不叶  
候間何卒金子十兩借用致度御願入候若此義承引無之に  
おゐて者義理を不存貪夫候間承給度候何分義の重きを  
存し正道之士を重し力を被盡度存候以上

成十月六日

浪士中

萬甚殿

證書

一金貳百兩也

右之通爲有志相〇候者也尤も承引於無之者即刻腹御  
痛苦可掛者也

十月六日

浪士中

萬甚

手代中

〇長州浪士三度ノ上書

陛下攘夷之御志者弘化年來始終盡一心也雖今日爲替候御義  
者不被爲在と奉存上候處去秋以來御境被遊候様相疑候者  
有之恤民之義者御天性に被爲渡猶更御深切に被爲在浦々  
島々之小民迄艱苦不致億兆安然其所を得ざる者無之様と

の御素志は被爲在候に普天本土誰か威戴奉らざらん然に  
 交易之害に而僻土に至迄一民も疾苦を免候者無之殊に  
 籠穀之下は而者殺氣凄慘人心恟々朝不恤夕とも可申實に  
 恐入候次第に候其所以然者を相尋候に松平肥後守之所爲  
 に御座候肥後守議其性惘愾に而庸劣名分を不辨又其家謀  
 共奥州荒僻之寒士は候得者唯其威を張城市を虐候事而已  
 而天朝之所貴且叙慮斯難有被爲在候御事をも相弁  
 不申緝紳を凌義士を忌昔時山法師之惡行よども甚敷其罪  
 を數候に十指も不能屈と雖其大なる者を舉候に去年八月  
 調練叙覽可被遊被仰出候節調練の不用之野戰炮數挺  
 御花島迄相運置却喝之爲は相備同十八日未明御築地内  
 をも不憚小銃連發仕○禁闕を奉○且其党の相圖は仕何等

之異變も無之又々主従戎裝白刃を以禁闕は押入候事是  
 其罪一也前關白鷹司公並三條殿以下當時被爲蒙勅勘候  
 國事○寄人等之御方は迄孰も國家之柱石被爲入聖朝御  
 輔佐之有○候處其大徳高才純忠至誠を奉忌候而百方機毀  
 暴に朝參を停め終に幽竄沈淪之御身となし奉り候是其  
 大罪一也夷狄を被爲恐候御事の申に乍不及外夷と相交候  
 義者其宗家先世之嚴禁にも有之候處長崎表に役人を遣し  
 置國參絹糸紬等を交易仕事に懇請仕叙慮を遵奉不仕祖  
 先之誼を破壊仕候事是其大罪一也當春廷議肥後守護職  
 不可然と越前家へ被仰付候者殆進退差逼り遷延に罷過候  
 内所々請謁又其職を得窮困之餘市井之無頼をかり集め壬  
 生爲屯且家謀共祿米等も宛行不申哉城市横行僅之過ち有

之候へり直に家産を没収致し或は夜陰辻切場物爲奪取落  
 中を擾亂仕候是其大罪一也其尤甚敷に至候而者去月五日  
 之夜遽に多勢を操出し藩邸を取圍み且旅宿等に押入多人  
 數殺害縛収所在家財等迄盜取尙又同月廿七日何故不知釵  
 戟旌旗相用遽に參内 乘輿を御立關に平附九門を妄鎖仕  
 候趣全く已が天誅を恐怖之餘り 禁闕を以身圍になすの  
 手段無法無禮朝憲を不憚幕法を不守次第普天率土驚愕憤  
 怒至に不堪候其惡逆暴戾之形跡に相顯候大成者大凡如斯  
 に御座候得共其小なる者も至而者筆紙も難盡況其心術  
 朝廷を蔑視仕候事ハ藤原信賴木曾義仲にも打越し畢竟ケ  
 様之者重き御役儀を冒候故攘夷の 叡慮も恤民之思召も  
 貫徹不仕只其 叡慮貫徹不仕而已ならず天下大亂之本皇

國○滅之秋に御坐候微臣等主人並三條殿以下御冤の宥被  
 仰付攘夷御國是速に相立候儀天地鬼神に誓ひ哀訴歎願申  
 出候處此亦肥後守所爲以既も時日を経と雖も曾以御採用  
 之御沙汰不被仰下終に深浪煽亂の族と認識し干戈内亂の  
 禍を不願列藩を欺き縉紳に迫り追討之廟議を奉促剩無勿  
 体も 風箏を奉搖動らんと迄姦謀相巧候段最早天下萬民  
 之爲其儘難差置 陛下祖宗之爲に誅除不仕候而者不相叶  
 儀も付討伐相加候間遽に九門内御逐拂洛外引退候様被仰  
 下尙赫然震怒天討之 勅語述べ被仰出被下候様奉懇願候  
 尤暫時 輦轂之下騷擾仕候儀可有之深奉恐入候得共其段  
 者不得止儀も付御宥免被仰付候様奉願候微臣等不堪恐惶  
 屏營懇祈誠禱之至萬死泣血謹奏仕候

七月

長州浪士中

○足利三將ノ木像並落文

文久三年癸亥ノ頃ニ當リ夷情愈切迫シ志士ノ激昂スル者一ナラズ時ニ松山藩三輪田綱一郎以下浪士數輩等持院ナル足利三將ノ木像首ヲ斫リ取リ三條磧ニ梟ス蓋足利氏ノ凶暴ヲ唱ヘ以テ關東ニ擬スルナリ守護職其疎曩ヲ惡シ即チ三輪田以下ヲ捕フ輩下洵々既ニシテ毛利家三輪田以下ヲ宥サソコヲ請フ守護職及ヒ越前中將等之ヲ聽カ

是ヨリ諸國ノ浪士頗ル毛利家ヲ望ムト云フ

- 初代 持院 尊氏 右ノ目マナコナシ
- 二代 寶院 義隆 右同
- 三代 鹿苑院 義滿 右同

逆賊 足利尊氏

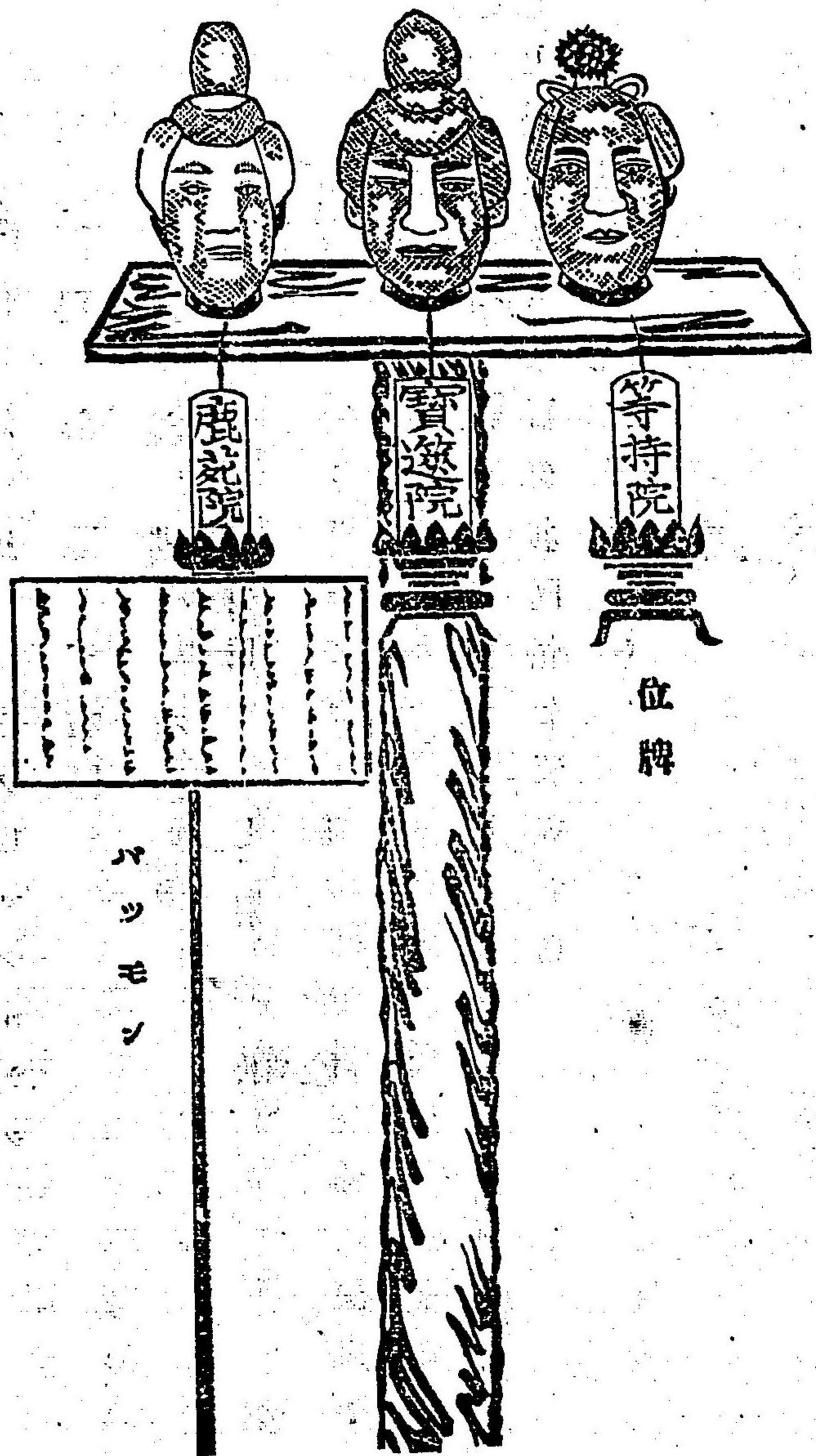
同 義詮

同 義滿

正名分之今日ニ當リ鎌倉以來之逆臣遂吟味可慮誅戮此三賊巨魁たるニ依而先其醜像ヲ天誅者也

文久三年癸亥二月廿三日





又四條橋ノ邊札ニ記有之落文左ノ通

逆賊足利十五代

此者共之惡逆者已先哲之所辨駁萬人之能知所にして今更  
 申に及びすと雖も此影像共を令斬戮に付而者贅言なから  
 聊其罪状を示とべし抑此大皇國之大道たるや只々忠義之  
 二字を以大率ととる神代以來之御風習なるを賊魁鎌倉頼  
 朝世も出て奉惱 朝廷不臣之手始をいたし尋て北條足利  
 も至り其罪惡實に不可容天地神人共に討とる所也雖然當  
 時天下錯名分紛擾之世 朝廷御微力にして其罪を糾し玉  
 ん事能はず遺憾豈可不悲泣や今彼等が遺物等を見るに至  
 りても眞に奮激に堪ず我々不敏なりと雖も五百年昔之世に  
 出たらんにの生首引振んものをもと握拳切齒片時も止事能  
 はず今や萬事復古舊弊を一新し時運遂に不臣之奴原之罪

科を正すべきの機會也故に我々申合先其巨賊之大罪を罰  
し大義名聞を明さん爲め昨夜等持院に有所之魯氏始其子  
孫之奴原影像を取出し首を刎て是を梟首し聊散舊來之羞  
憤者也

亥二月二十三日

大將軍織田公に至り右之賊統斷滅そ此事愉快といふべし  
然に夫々以來今世に至此奸賊に猶超過し候者有り其黨許  
多にして右罪惡足利等之右に山の若其等之輩具に舊惡を  
悔忠節を拙て鎌倉以來之惡弊を掃除し 朝廷を奉補佐て  
古昔に復し積惡を償ふの所置なくんば滿天下之有志追々  
大舉して可糾罪科者也以上  
右ノ首トモ三日振ニ取除ル此日四五輩相伴テ等持院ニ

至門番ニ問ニ夜六ツ過頃十人斗這入矢庭ニ取出シ門ヲ  
出テ時迄つと笑ツテ行キタル由  
右罰文ハ長三尺幅壹尺餘之板ニ記シ三條橋ノ西ノ詰ニ  
有之札場ニ掛有之見物人夥シク有リ由

○銀座四丁目張札

我々皇大國彼醜夷之爲よ甚侮汚穢を蒙り我是が爲に日夜  
寤寐切齒痛歎とると既に數年然も今年二月中英夷之軍艦  
渡來して其齎し來る所之書翰島津三郎一族を於不渡り此  
五拾万トルヲ外三万トルヲを可相渡若兩條共不相成  
者長崎箱館其他諸港共亂妨いたし且江戸大坂共燒拂へし

と其書大略如此之無禮驕慢我國をして婦女子の國たらしむ誠以怒激發憤之至ならそや蓋是ハ元より我を惱擾して膽を冷さしめ數多の大金を食んどの姦計のみ實は首を切肉を喰候而も猶不可足を老中井上河内守松平豊前守等之如き臆病腰拔之輩其奸計たるを不知大に恐怖狼狽して重大之事件として松平春嶽公より速に打拂可申と申越候を取用無之暫之期日限猶預申入處益増長して一刻も猶預不相成旨斷に及<sup>コトナク</sup>付右二老交吏<sup>オモテ</sup>ニヨストルに取扱願入刺此節に至而ハ四十万トルヲ程之大金を可渡と談判に及候段誠は以悲しひ哉血涙止へから老然とも右兩老ハ素より犬馬同様之腰拔けともなれハ論は足されども水戸中納言等も既に歸府して在ながら如此所置ハ如何成故不故中納

言之神靈は對し何面目有哉又其臣下も諫を入さるハ水戸之武威も盡たり嗚呼如此國辱四海は輝して何ぞ少しく自ら恥之心なきや凡て政府大小之役人ハ皆國賊にして神罰免かれさる之輩なり假令如何成深謀遠慮鎖港之儀有るも不<sup>レ</sup>成〇〇〇數十万トルヲ相渡との實に皇國之大恥辱也永く〇吏に止後來〇夷の口實に成ハ豈悲しからざらんや恥を知らざる是を禽獸と云我皇國をして禽獸の國に陥らしむ嗚呼如此ハ父君を弑するの罪何ノ歟重きや然して初より臆病未練之兵事恐れ大金を出して濟さんとならハ諸人を騒かせ下を動搖さする迄も是か爲は大金財を費さしめ農民之農時を奪ハ天下を困窮せしむ嗚呼何の面

目有て上天日を拜するや下民は對するや然して自分ハ尺寸も報國之志なく因循苟息虚飾のみに○○○身の提防のみ構ひなから唯人々のみ報國を盡させ國恩を遺忘すへからそなど命令のみ五六度是を出し何ろ天下の人皆汝等如き罪輩にあらんや其命令なくとも誰か報國之志を忘さらんや今吾切齒痛憤之餘り此書を張置て天下有志之諸侯英勇義膽之忠士を普く勸しめ○日我党を率ひ來り水戸中納言初老中以下此度國恥辱を取斗者共の首を切肉を喰ひて此處は暴し天神地祇之震怒を慰せんとする而已

文久三年夏五月

皇國之忠士

(端書) 此書此は張置て三日之内取捨事ナカレ三日過て老中迄は直達不申若或は取捨或は達セスハ

他日必禍其身に及ナリト有り

○張札落書

松平肥後守

右之者尊王攘夷之大義を知らず頻年宸憂被爲遊候處攘夷之實行相立天下忠義之士奉痛心候も一圓不相辨尤今春大樹公上洛名分被爲立候御事ハ實に二百年來之御盛舉之事に而格別叙慮被爲遊候様子朕民に至迄難有事に奉存候處肥後守奸逆を以齒之姦党を結ひ五人之同類と隱密に相謀り忠義無二之御方を迫而讒訴し恐多くも殺害まで相企終は天下攘夷之機も大に相弛み大逆無道元々天誅不

義の疑なしと雖も 大樹公名分被爲立候まても水之泡と  
相成候のみならず 神州隆盛之大機を破り遺憾徹骨髓候  
朝廷を奉始天下忠義之士兼而關東役人共之姦計を大に掛  
念致候處果して此度彦根に敷等過候娘様無道之罪狀世間  
一同落着之事に付一々不致教舉諸人忠怒を忍ひ天地神人  
之明罪誓而可相待者也

曾而關東役人之奸惡を恐多くも厭せられ  
こと國も○そ有ども俱みみな吹拂ふべき神風もかな  
神州も生れし人豈愛積に不堪へけんや

(右九月十五日之朝御屋敷板に張有之候由

○義勇軍士祇園社西門張札

松平肥後守

此者固陋頑愚不知遵奉推戴之大義矣恣暴然力微不能遂素  
志近者類逆賊隨人之大力奉要朝廷過暴義不知其實○薩  
人所售○モ亦甚矣神怒處可加天誅者也

亥八月廿一日

義勇軍士

○落書寫

抑陰陽二柱此神此天地を開き此皇國を生み給ひ皇統  
を繼ぎ天照皇大神に至り國体始終○○○○傳授し  
給ひ天地と不朽の皇國なれり寸地も外夷に汚されて

御歴代の御神祖に被爲對 叙慮被爲安忍多も  
 今上皇帝 叙斷古今に超越し玉ふ御才徳可被爲渡候故外  
 夷渡來之始より攘夷之叙念不被爲絶始終如一不撓し 御  
 叙斷に而上り太古より御代々之神靈への大孝下り天下万  
 民を怒み給ふ大仁實に万國夷朝も無比類 聖天子も被爲  
 渡候段天下蒼生も至る迄感佩奉仰候往昔天下之職掌頼頼  
 御委任之後蒙古之夷賊犯し來ると雖北條氏の盡力上り神  
 州八百萬神震怒し給ひ天地も○○渠を塵もす功も亦不偉  
 哉徳川氏も至り家康公深く外夷を愛ひ諸夷を拒絶するの  
 遠慮明知に依り二百年近き太平を保候然に方今徳川家門  
 譜代之者共屢違 勅命而已ならず家康公之掟も相背き  
 水戸景山公之如き英智卓出之人を擯斥致し高貴之御方を

落飾幽閉致し正義之士を戮殺致し○掃部頭ハ先年於櫻田  
 天誅を蒙りしと雖尙不撓一族並家門之者共宗家徳川氏を  
 して不忠不義も陥らしめ無智之弱將軍を滅云々も至らし  
 めんとす故に昊天震怒し天龍頻に至り江戸城之燒失大坂  
 之大火是皆天より災害を下し徳川氏をして正も返さんど  
 なし玉ふなり夫れ自然の道理ハ天地鬼神も所不能違也况  
 於人哉君子ハ謹愿○○○小人ハ邪僻にまて至凶會津肥後  
 守ハ五万石の私欲より掃部頭に勝る奸計を行ひ其罪實に  
 彦根も超たり中川彈正尹ハ三千石私欲より會津も與し假  
 に兄弟之約を結ひ陰謀を相巧み律僧忍海も命し 皇帝を  
 呪阻し候段天朝に對し大逆賊禽獸も劣り申候其上此頃  
 天子も同様之御冠を職方へ命し調へ候段潜上之野心明白

也右等之奸計新話に造成證據を止め置候間何時にても一  
 に差出候時の天罪難遣者也如此彈正尹之邪謀を相助け候  
 二條近衛徳大寺等も幕府へ阿諛し開闢之 天子を忘れ私  
 欲に溺れ自然之道理も違ふ兇惡必至り可申候右に付官武  
 の奸徒今日も改過悔先非候り、 家慮を不矯淳粹無二御  
 誠忠之鷹司殿下之驥尾に附て赫々たる 神州之名分を正  
 し正義を以て 天恩も奉報候赤心不相顧ふ於ては有志之  
 徒決死粉骨碎身して可加誅戮者也此等之義當職正義者之  
 御方々速よ被遂奏問候様奉願上候恐惶謹言

亥十二月 日 有 志 中

○佛人豐前小倉へ上陸之砌差出書付

チガト、シウ、ノ、スミビトニ。  
 フラソノス。イダ、シヨ、テイ、トク、ヨリ。ツゲ、シラサレタリ。コソエ  
 ロ。ナカトシウノ、トノサマ、マツダイラ、ダイゼンノタイフト、  
 モウサル、オタイシロウヨリ、フラソス、ゴクノ、ハクサ、タツ  
 フチチ、オウズツニテ、ウタサレ、タルトコロ、コレチ、ワガシニ  
 、タイシテ、オウイナル、ケイベツト、ソソテ、イマ、ウレ、ミキ  
 ノ、トノサマチ、タレスニ、マエル、ケレドモ、ワレニ、ムカワヌ、ツ  
 ミナキナガト、シウヤウノ、スミビト、マタ、ソソマコドモ、ウ  
 ナ、ナトモ、ウチカイス、コ、ロ、ナカル、ユエニ、ソノナカト、レウ  
 ヤウ、ノスミビトニ、オイテ、ワレスコシモ、オドロクニ、オヨビ  
 マセヌ、カエリテ、モシ、ナニソ、ヨウシアリテ、カ、ワカフチニ、ソ

ルヒトアラバ、モト、ヨリ、ノ、トウリ、モツパラ、フランス、テイコク、ト、ニツボソ、テイコクト

フランス大將テイトク

上陸三人名前

テイウル

フウラクマ

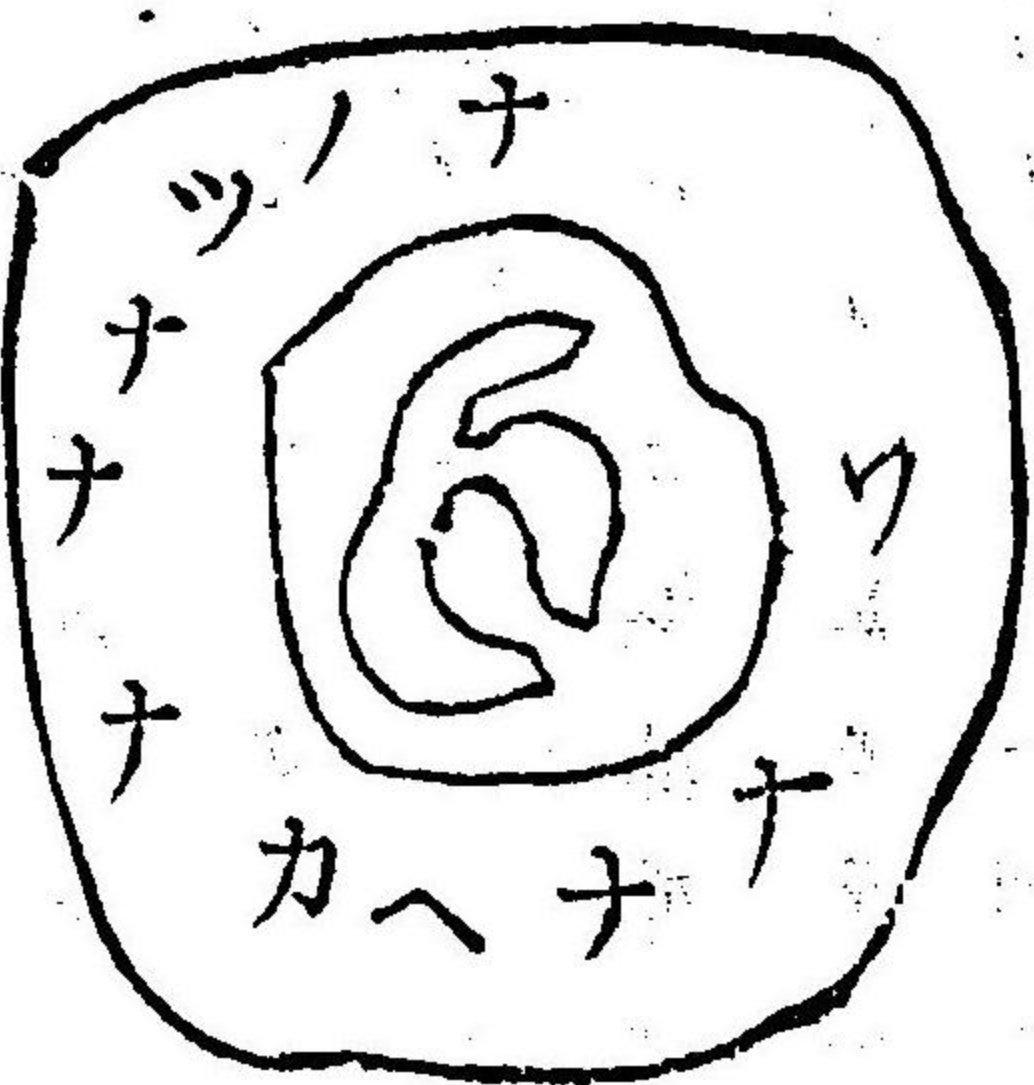
ホウリユ

コンセンノ、シヤウヤク、ムス、パレシ、トキヨリ、イマノトウリ、ヨリ、コンセツコ、トリアツカリソルベシ、ハタマタ、シヨクモツチ、ウカフチモノセツチ、マエルヒトアラバ、ソウオウノ、チダソニテ、ハラワシマヌ、ミキラチ、コンセンチモツチ、ツ



ゲシラカルコト、カクノコトクニサムラフ、キンゲン

ニッホン文久三亥年六月四日  
フラン 千八百六十三年七月十九日



セヨントス

○亞魯英佛四州盟約書和解

維新改革ノ未タ成ラサル國家ノ志士何ソ其ノ苦慮スルノ甚シキ夫レ此書ノ如キハ決マテ實ニ之ヲアリシ者トハ思ハザルナリ殊ニ末尾ニ記スル



所青樓遊女云々等ノ談ニ至テハ幾ソト一笑ニ付  
スヘキノミ唯々其ノ當時ノ先進家タル者姑ヲシ  
假ツテ以テ天下ヲ振ハシムルノ一策ト爲シ即チ  
此ノ如キノ一書ヲ作リタルモノ歟

我各國往年日本國ヲ屬國タラシメテ謀ルト雖モ彼國  
ハ我紀元ノ始ヨリ諸州ニ獨立シテ他ヲ交ヘズ加之勇壯世  
界中其名右ニ出ル國ナシト深底恐怖ノ心ナキコアラス此  
頃年墨國其魁トナリ書ヲ以テ和親ヲ求メ驕威ヲ以テ互市  
ヲ謀ルニ驚惕シテ許諾ス是ヲ以テ案スルニ柔弱清國ニ劣  
ルヲ遙ナリ實ニ累年延期セルヲ悔ユ知辨ノ不足モ又嬰兒  
ヲ欺ニ類ス此ニ因テ遠謀成就近キニ在ルベシ彼ハ港ニ商  
館ヲ開シキハ國則チ以テ國民ヲ傍近セシメサルヲ甚シカ

ルベシ故ニ推歩モ數里ヲ以テ限ルヘシ港ノ外漂流滯船ヲ  
可訥然ルキハ日本ノ費用ヲ不借シテ以テ誓約セハ滯泊數  
日及ト雖モ愚昧ノ國吏委諾其妨ナカルベシ是我大幸トス  
ル所ナリ商館ニ在滯セハ近界ノ商家ニ利外ノ利潤ヲ得セ  
シメ耕民ニハ往々我租稅ノ薄ヲ說愚民ニハ我教法ヲ說キ  
諭スヘシ如之風波ニ託シ漂流ト稱シ數艘ヲハ港ニ集湊シ  
テ臨機應變兵庫ヨリ發起シテ京師ニ入ラハ玉都ヲ握ラン  
テ掌ヲ握カ如シ同時神奈川ヨリ峰起シテ江府ヲ襲ハ、東  
西惑走シテ和兵手ヲ束ヌルニ至ラン時下田浦賀ノ兵東西  
ノ遊軍タルベシ新瀉ノ商館ハ北越ノ運送ヲ可妨箱館又同  
之奥羽ノ兩國ノ糧ヲ働シテ勿ラシムヘシ如是ハ必勝日ヲ  
數フベシ情此紀元ヲ復考スルニ墨國ノ智ト云ヘシ始メ書

ヲ渡シ次ニ互市ヲ乞フ信義ヲ以テ謀リ是ヲ許諾スルハ  
寡ルニ弱ヲ以テ功勞最一トスヘシ書翰贈答ノ遲速ヲ以テ  
強弱ヲ知ルヲ神妙ナリ返翰ノ拙文ヲ以テ言行ノ差ヒ下愚  
ナルヲ察スルニ足ソリ速ニ事就ノ上ハ入貢米穀ヲ第一ト  
スヘシ下田ヨリ以東ハ亞國領スヘシ以西ハ兵庫ヲ限リ魯  
國領スヘシ兵庫以西ハ佛英兩國領タルヘシ前條違亂不可  
有之盟約ノ狀如件

右一通は兼て薩摩より神奈川青樓へ手も廻り居外蕃の  
時情開取候へ、早速よ可申出どの内意に付原書<sup>○</sup>の儘遊  
女等の手に前<sup>○</sup>を得て差出す所五洲重大の誓約書面なれ  
ば不取敢薩の蘭學局よて翻譯よ相成りしと云

慷慨  
義烈

報國纂錄卷之四

○南山義學浪士ノ張札

文久三年癸未歲長藩攘夷親征ノ朝旨ヲ天下ニ示  
サノ爲メ先ツ大和ニ行幸アラソクテ請フテ而シ  
テ遂ニ却テ疎外セラレ、等ノ事アリ夷情日ニ迫  
ツテ志士ノ心中燃ルカ如ク切齒憤激幾ント禁ス  
ルヲ能ハス藤本津之助(備前)松本謙三郎(參州)吉村  
寅太郎(土州)安積五郎(江戸)西田稻雄(同)保母建(同)等  
諸藩ノ志士ト相合シテ和州ニ據リ廷臣中山忠光  
ヲ戴テ將ト爲ス其兵凡壹千號シテ天忠組ト云フ  
乃チ朝命ヲ矯メ兵ヲ合テ河州狹山丹南白木等ニ  
入リ其藩主ヲ説キ大小砲馬具等ヲ借り千窟ヲ踰

ニ八月和州五條ニ抵リ縣令鈴木源内ノ後邸ヲ襲  
ヒ源内及ヒ小吏五人ヲ屠戮シ糧米器械彈藥ヲ奪  
ヒ遂ニ此ニ據ル既ニシテ土地ノ人民ニ行幸ノ事  
ヲ告ケ五條近傍ノ地ヲ天朝領ト稱シ田租ノ半ヲ  
獨キ務メテ民心ヲ収ム是ヨリ高取城ヲ襲ヒ紀州  
ノ隊長水野多門藤堂ノ隊長藤堂新七等ト戰ヒ又  
彦根ノ營ヲ襲撃シ遂ニ戰敗シテ藤本松本等皆死  
シ中山忠光大坂ニ走リ安積五郎等拘執セラル誠  
ニ一大激動ナリ後人之ヲ稱シテ大和一揆ト云フ  
實ハ南山ノ義舉也

和州五條備札場梟首並捨札ノ寫

御代官 鈴木源内

元ノ長谷川義助  
用ノ人 黒澤泰助

木村祐治郎

常川莊治郎

此者共近來違勅ノ幕府ノ逆意ヲ受專テ有志ノ者ヲ押付  
朝廷幕府ヲ同様ニ相心得輕シ三百年ノ義ト申募リ開  
闢以來ノ天恩ヲ忘レ然モ是カ爲ニ皇國ヲ辱夷狄  
ノ助ケト成候事聚歛ノ意モ不少罪科重大依之加誅戮者也

八月十八日

今度此表發向ノ趣意ハ近來攘夷被仰出土地人民ヲ預リ候  
者共專己驕奢ノ爲諸民ヲ苦シメ候上却テ攘夷ノ  
ヲ妨ケ候族多近日中御親征被仰出候テ萬事取調ノ爲既

當地代官鈴木源内ハ其罪甚重者故加誅戮畢以後五條代官  
支配所ノ分 天朝御直ノ舊民ニ候間此度本ニ歸リ候御  
祝義トシテ今年ノ御年貢是迄ノ半通御免被成候向後取固  
ノ事手輕ニ致シ置度候トモ尙 奏聞ノ上可致沙汰右ノ  
旨小民ニ至ル迄不洩様申聞難有拜戴仕可致忠勤候事

亥八月

右ノ趣被仰渡候間寫テ以テ相達シ候以上

皇祖天神天地開萬物生シ給ヒテ 皇臣其天地萬物ヲ惠マ  
シ給フ處也則 皇帝ハ天地ノ大宗主此故ニ萬民ト雖トモ  
廟裔ノ孫ナシハ神ハ祖也神也先祖アラシ限ハ臣也子也乃  
先祖ニ事仕奉如ク事奉ハ忠孝ナルベク處是ナキ者也天地  
人民主家有之者モ君家ノ臣ニシテ主家ノ臣也既ニ有冠ノ

者ハ皆朝廷ヨリ交ル處時白也是君臣主從ノ分ヲ辨ヘ候  
者土民各其職業ヲ勉メ祭ヲ助ケ藩屏トシテ 國恩ヲ報ヒ  
奉ルヘシ是則天人一致ノ大道日夜敬ヒ奉ルベキ事  
文久三亥年八月 近來洋夷渡來已後不可屈不可辱受候義深ク被  
思召被惱  
宸襟候處土地人民被爲預候處ノ諸大名耳ニ如不聽目ニ如  
不視元來藩屏ナルベキ義利ヲ忘却シ却テ違 勅ノ邪奸ニ  
與シ追々夷狄ノ術中ニ陷リ既ニ 皇國夷狄ノ奴輩ナルヲ  
モ不知歎ケ敷事大和 行幸 神武帝山陵春日社ニ於テ  
御親征ノ御軍謀被爲遊候等ノ事ニ候得共猶妨ノ族有之實  
ニ恐入候事ニ候依之不堪憤意義兵ヲ召諭爲可奉迎  
驚興此表ニ發向セシメ且天朝ハ君也幕府ハ臣也君臣主從

ノ大義ヲ被存ニ於テハ早速會盟可被定其籌策若不預會盟  
ニ於テハ不移時日可紀其罪事

文久三亥八月

大和國中諸大名  
其外土人ニ至ル迄

(右五條戎前四ツ辻ノ真中ニ割竹ニ挾ニ候テ建テ置候寫  
也

和州郡山柳町行當リノ大門ニ張紙之寫

當藩重役等禁裏御膝元ノ國柄ニ罷在候處兼テ尊王攘夷  
ノ心掛ケ手厚ク可有之等ノ處無其義武備ニ怠リ聚斂ヲ主  
シテ忠良ヲ退ケ佞邪ヲ舉用ヒ土主人ヲ欺キ下領内ヲ虐ク  
專私欲恣ニ致シ候段不堪ノ限ニ候上剽國政切迫ノ時勢

天朝被爲惱宸襟候時節ニ付勇悍忠節ノ士御選ニ御禦兵  
可貢獻勅語ヲモ輕ク相心得君臣ノ忠ヲモ不必得柔弱懶  
惰ノ者ヲ差出シ候始末重々不屈ノ至リ早々改心致正義ニ  
歸セサルニ於テハ邸宅ニ圍込攘夷ノ血祭リニ可行者也

八月十九日

此書付三日ガ間メノリ候者同罪ニ行フ者也

○毛利氏奉勅始末寫

癸丑外夷ノ事起リシニ戰争ニ決シ和議ヲ付ケ候ヲ以テ  
度々幕府ニ及建言戊午墨夷ノ請閣老ヲ以御親ニ相成勅  
諭無之殊遣テ下シ候其節モ叙慮遵奉之主意ヲ以待夷

之其策被為建慶段建自仕候處幕政因循終上己上元ノ變  
 ヲ釀シ候次第不忍傍觀家臣重職ヲ者ヲ以官武間ノ周旋申  
 付於關東ハ一橋越前ノ登庸申立候得共不相叶田安上京板  
 倉間老ノ撰任ヲ申迄之議定一先 朝廷向ノ御様子御  
 伺仕ヲセ候處豈料家臣ノ者愚意取失ヒ自己ノ密疏ニ及ヒ  
 候ニ付速ニ嚴罰申付奉露 宸疑彌以周旋尽力候様厚朝命  
 ヲ蒙リ候ニ付其節先年來被仰出候 勅談並御沙汰書ニ當  
 リ候而御定議ノ御旨奉親候二事六ヶ條ノ内下田條約通リ  
 ハ乍御不本意御許容被遊候御事歟ト御伺申上候處御附紙  
 ヲ以テ下田條約尤不被為好候得共既ニ以前於關東為濟候  
 上言上有之歎 思召候處重而仮條約數ヶ條言上實ニ被遊  
 思召廿六日御別紙ノ旨無余儀被仰出候義ニ而 勅許ニ

而者無之其以後自關東言上御約定可有拒絕堅固御約定ニ  
 候且又蠻勇追々驕傲猖獗下田條約頃ト同日ノ諭ニ無之ヲ以  
 外ノ義利ニ到當時下田條約被宥可然ト難被仰出仮條約  
 ハ御破却御拒絕被遊度 思召候ト御答被仰出候間御確  
 定 叙念始而伺定彌決心 叙慮貫徹候様盡力可仕ト家來  
 共ニモ堅申聞セ悴長門守關東ニ差下右親濟候外御赦宥ニ  
 條追々遂其節候通ニテ此餘ハ攘夷ノ大義一途ニ周旋不致  
 而ハ事多端ニ涉リ却テ 叙旨貫徹ノ職相立間鋪ト考最前  
 寔定候下田仮條約御破却御拒絕ト申 叙慮ノ處被為向幕  
 府ニ精々可申解旨書面ヲ以前關白殿下ニ家臣差出言上仕  
 ラセ候處委曲御領掌被為成其後言上ノ趣全 叙念御符合  
 之段被仰聞候ニ付其段長門守ニ申遣シ猶又攘夷ノ義於幕

府關決定列藩へ布告策略ノ次第拒絕之期限等衆議可及奏  
 聞旨 勅使ヲ以關東へ被仰遣右同様に御旨私へモ被仰  
 開周旋盡力候様トノ御内命正親町三條殿ヨリ御書面ヲ以  
 被 仰下候間長門守事ハ於關東微力ヲ竭シ越春嶽土容堂  
 其 索ヨリ同論同志之上老練ヨリ有之不容易更耻曳是モ遂  
 其 訛候ヲ歸京將軍家ハ長門守へ隔 叙遣遵奉可致トノ御  
 直 答ノ次第迄及奏聞 叙感之旨被仰聞段最前於關東將軍  
 家 上洛之義御採用ニ相成居候間右 勅命遵奉ノ上ハ列藩  
 へ 策略見込相認上洛前途差出候様トノ幕命有之候得共於  
 私 父子ハ 叙慮ノ御深旨ハ戊午年來ノ御決定ヨリ戰ノ勝  
 敗ハ必御算定被爲在義ニテハ無之唯國體ノ立不立義理ノ  
 關 不關ト而已ニテ 聖斷被遊候御事ト奉賜其證ハ戊午三

月廿三日閣老へ御渡ニ相成候御沙汰書ニ今度ノ條約逆モ  
 御 許容難被遊 思食候衆議中自然延遷彼ヨリ及異變候節  
 ハ 無是非ト被 思食候ト有之候得共仮條約破却ト申事ニ  
 相 決候ニ付天下ニ一統決戰ト心得ハ勿論ノ事ニ可有之ト御  
 覽 申上候處其節條約破却一決候者先達ヲ御内沙汰ノ通リ  
 尤 天下ニ一統決戰ハ勿論就テハ防禦速ニ相整候様被遊度ト  
 御 付紙ヲ以被仰聞候午年ニテハ無是非義ト被遊 宸斷  
 候 御事ニ御坐候得ハ今日ニ至リ仮令武備不充實共攘夷ノ  
 延 引可相成理無之ハ天下ノ公論 宸斷ノ御旨實ニ天祖御  
 受 傳ノ 皇國眞武正氣奉戴長門守並家臣共ハ此旨趣  
 重 疊申合於關東幕府其外ニモ伺取ノ儘ヲ申爲傳候處  
 勅 旨遵奉ト申事ニ相成自是ハ自國引受之武備仮成ニモ取

並期限決定候ハ、後ノヲ取間敷ト父子申合居候得共從  
 朝廷御差留ニ有之旁長門守義以京師ニ殘置於私ハ速ニ歸  
 國國政改革武備仮成ニモ整候内將軍家御上洛列藩集議將  
 軍家御滯京十日歸府廿日後ハ必拒絕ト申御請ノ由ニモ相  
 聞候得共御彌決定ノ義不相分候間當三月十二日長門守  
 リ家臣ヲ學習院ニ差出攘夷期限彌何日頃ニ御決定相成候  
 哉ト書扣ニシテ御伺出仕ヲモ候處翌十三日御付紙ヲ以四  
 月中旬決定ト被仰聞候段國元ニ申越致承知即時國內ニ  
 布令致シ候ハ四月中旬迄ハ先應接不得止征討中旬後ハ直  
 襟征討ト相決要衝之場所ハ成兵差出置候處夷船成丈ケ  
 警戒仕居候内次月廿一日傳奏坊城家ニ外夷拒絕ノ期限  
 來五月十日御決定ニ相成候間益軍政相整醜夷掃攘可有之

由御沙汰有之同月廿三日同家ニ攘夷期限五月十日無間  
 違拒絕決定之段將軍家御受有之由御達ニ相成右御受書ヲ  
 モ被相渡幕府ハモ攘夷ノ義五月十日及拒絕段御達ニ相成  
 候間右ノ心得ヲ以自國海岸防禦筋彌以嚴重相備ニ襲來ノ  
 節ハ掃攘致シ候様水野和泉守ト違有之其以前三月十八日  
 之幕令ニ攘夷ノ詔奉戴候而早々拒絕ノ及應接外夷承伏  
 不仕候節ハ速ニ打拂候様ト有之夫々五十日隔五月十日  
 ニテハ談判ハ勿論策略ハ素々幕府ニ御委任ニ候得共順ニ  
 相立候事故拒絕期限御布告ニ相成候事ニ可有之況ニテ年  
 來攝海防禦筋苦心致シ見候處明石加田嵯峨關赤馬關ノ四  
 口ハ右攝海ノ要衝ニテ殊ニ赤間關ハ中西國ノ咽喉ニ候得  
 ハ拒絕期限以後赤間關出入ノ夷船万一攝海ニ亂入ノ往來



難計私父子共年來 叙慮貫徹候様ニ、官武間ニ周旋致  
 ナカラ攝海亂入ノ船ヲ領内ニ於テ自儘ニ往來致サセ候テ  
 ハ、朝廷幕府ニ奉對言行相違面目無之次第ト存込居候ニ  
 付警戒彌以嚴重ニ申付竟ニ五度馬關ノ戰爭ニ及ビ素ヨリ  
 墓々敷軍モ不出來候得共、叙慮遵奉幕議承順ノ寸志ヲ相  
 違是方シテ彌以國政ヲ一新シ武備ヲ全治シ、皇國ノ御武  
 威ヲ海外ニ輝シ候様仕度ト日夜苦慮仕居候處因州浪花ノ  
 一舉ノミコテ眼前小倉ノ如キハ我苦戰ノ狀ヲ傍觀シ隣交  
 ノ情誼不相辨候間、叙慮幕議ノ貫徹如何成障有之哉微力  
 獨任ニテハ一身一家ノ分ヲハ盡シ候得共、御全國御持固  
 メノ目途難相立事ト考ヘ其段及言上無西列藩ニモ使節ヲ  
 以テ應援ヲ乞ヒ且其見込ヲモ尋問シ又、朝廷方モ列藩ニ

無浪御布告相届候様相頼候處恐多シモ期限不相違速ニ及  
 掃攘候段、叙慮不斜御旨蒙御沙汰猶又態々監察使御下向  
 ニテ軍勞御慰撫有之、全國感激死力ヲ盡サント決心仕候  
 左候テ玆前共外五藩ニ應援ノ御沙汰モ降リ追々列藩ノ厚  
 意ヲ辱シ鹿兒島英夷トノ決戰洲本明石ノ炮發有之候然ル  
 處於關東ハ和蘭魯佛其外同様ノ御處置ニ相成候義主意柄  
 難相分候テ四月廿一日、朝廷方被、仰出候趣水野和泉守  
 方三港奉行ニ申達候通ニハ不取行旨申出候由然ル處於私  
 ハ和蘭之義他夷同様拒絕可然段既ニ御伺仕候事ニモ有之  
 其上於將軍家、勅意御遵奉之儀ハ長門守ニモ直答モ有之  
 拒絕期限御達ニ相成候上ハ其筋ニテハ幕意聊カモ、勅旨  
 ト阻語仕候様ハ無之筈且一旦兵端相開候後ニテ最早稔

便ニ難取計段幕府ニ申立置候然ル處一檢卿方ニ聞老並大  
 小ノ有司同心仕候者一人モ無之トノ義關白殿下ニ書中ヲ  
 以テ言上有之其節將軍家ハ滯坂ニ候處小田原迄罷下リ  
 聖旨貫徹候様所置仕度段言上有之由ニテ朝廷方京詰  
 家臣等ニ御下問被爲在候ニ付此義一段可然義ト内密御  
 答申上候由斯迄將軍家苦心ノ事ニ候ハ一檢卿談合屹度  
 貫徹之驗モ可有之ト考居候處豈料於大坂六月十二日水野  
 和泉守方夷國拒絕之義ニ付了解難致廉ハ可相伺筭猶横濱  
 談判中未御手切ニ不相成内猥リニ兵端ヲ開キ國辱ヲ取申  
 間敷隔以御手切之上御達有之迄ハ渠方不襲來ハ粗忽無之  
 様トノ義家臣ニ申聞有之候得共既ニ家臣ノ御旨被仰  
 聞家來未々迄勉勵之折柄ニ朝旨幕意ト組語仕候様ニ又

ハ甚不可然義且國ノ榮辱ハ戰之勝敗ニ有之間鋪只正氣  
 之盛衰ヲ以テ榮辱ヲ分ケ可申猶又拒絕之義ニ付了解難仕  
 廉無之由相答置候處又々於江戸今度京師ニ被仰立候旨モ  
 有之拒絕之義ハ勅命ニ候得共策畧ハ御委任ニ付此上彌  
 打拂候迄ハ幕令相待航海船ニ發炮差扣候様トノ義密封ニ  
 シテ渡方ニ相成候得共叔慮遵奉ニテ拒絕期限御請有之  
 候ニ付即幕意ヲ承順シテ拂攘之及沙汰候間妄動トハ不心  
 得又國力ヲ不顧義必作興ヲ以テ要務ト考定追々及建白候  
 事ニ付幕府ノ策略モ愚考ヲ御採用相成候事ト相考何分只  
 今戰圖相止居候而ハ一藩ノ動亂不容易段相答候彼是之應  
 答ニ道路相隔書中意味難通義モ有之ナル哉竟ニ直ニ幕使  
 下向ニ相成五月十日夜亞船ニ發炮並外夷拒絕之義ハ談判

決定不相成以前襲來モ無之船へ安發候事詰問有之候ニ付  
 拒絕期限五月十日ト御請相濟候段自 朝廷被仰聞候間期  
 限方ハ夷船ト見受候ハ、可打搦様及沙汰置候ニ付十日之  
 夜國柄ハ不弁候得共夷船ト見定及炮撃候猶又談判ニテハ  
 拒絕之驗不相立驗不立ハ拒絕トハ難申談判ハ拒絕前ニ有  
 之事ト相考且夷情難斗通行襲來何レモ差別可相立哉期限  
 方ハ必戰ト心得專ラ沙汰筋ヲ守リ及奮戰候事ニ付妄動ト  
 ハ不相考段書付ニテ關東へ申越置其後ハ爲何義トモ不  
 申來候得共將軍家ノ忠誠輔佐之以一橋卿之賢明勅意遵  
 奉之上拒絕期限ヲ書付ト迄ニテ言上有之且御上浴中拒絕  
 應接振從 朝廷御尋有之候節一時和親交易取結候得共元  
 來不經奏聞開港候事故聞國人必不居合之廉可申渡ト御

答書有之事ニモ候得ハ談判ニ而拒絕期限延引ニ及ヒ候共  
 幾月ト決定致兼候儀ハ無之筈其節中川宮御建言ニモ掃攘  
 之儀遲々致候ヨリ國內一致ノ場ニ至ラズ既ニ及接戰候へ  
 トモ列藩拱手傍觀致シ候様ノ次第不堪切齒云々猶又○○  
 先鋒被蒙仰度御懇願モ有之是畢竟午年ニモ 聖察被爲  
 在候通有司之不取計ニ出ル事歟ト考居聞藩其疑ヲ抱キ憤  
 懣之餘リ如何様ノ義出來モ難斗ト鎮靜方苦心大形ナラズ  
 候處遂ニ夜中何者共不知 幕使旅館へ令狼籍候様ノ義モ  
 有之右様 叙慮遵奉幕議決定ノ上猶モ不徹慮之議有之  
 候ハ如何ナル故ニテ候哉奉對 天朝申上ハ恐多候得共  
 叙慮彌以御決定卓然ナル御實行天下感動仕候程ノ  
 宸斷被爲在候外ハ御所置モ御坐有間敷ト奉愚考兼而奉伺

候御親征之思召此時宸斷被為在度御事ト石清水マテ  
 行幸暫於彼地御軍議攘夷之御耻曳被遊候様ト家臣ヲ關  
 白殿下ニ差山内密建白仕マセ候處宸斷意表ニ被為出大  
 和行幸神武殿並春日社等御拜暫御軍議伊勢神廟御拜可  
 被遊ト御旨被仰出誠以驚起威誓仕自國攘夷ニ掛念ニ  
 候得共父子間申合供奉申立度理裝罷在候處八月十八日  
 何事トモ不相知俄ニ堺町御門ニ干戈ヲ持野戰炮ヲ列シ多  
 人數出張有之候ニ付警衛差出置候家臣等兼而之申付テ守  
 リ覺悟モ極居候得共九重近キ御塙所柄奉憚朝威武備嚴重  
 ニ仕居候内御門固メ御免有之勅使ヲ以攘夷御依頼ノ  
 勅命ヲ被仰聞候ニ付京諸人數國路ニ引歸其後上京御差  
 留家臣九重内之立入御禁止且家臣共不束之取計有之候ニ

付取調候様トノ御沙汰ニ候得共憚朝威忍勇憤候段而  
 已申出兼而申付候處之尊攘之大義モ相守リ候而ノ取斗ニ  
 テ各科申付候ニ難忍就而ハ御歎願申上候通御坐候此余  
 宸疑難被為露義ニ被為在候ハ乍恐父子玉坐近ク被  
 召出前段ノ始末委細言上仕度其上ニ而猶モ叙慮ニ不相  
 叶慕意ニモ違ヒ候事ニ候得ハ如何様ニ御詔責ヲ蒙リ候共  
 聊遺恨無之ト決心仕候猶八月廿五日御書付ヲ以勤王ノ  
 諸藩不待幕府之示命速ニ可有攘夷之由叙慮被仰出候ニ  
 付聞國之士民彌以攘夷ノ布告嚴重ニ申付候

松平大膳太夫

松平長門守

毛利讚岐守

文久三癸亥年十一月

百八拾三